

マレーシア・サバ州における 「越境」への社会・文化的対応

文化協会の動態に見る民族の再編成

上 杉 富 之

はじめに

近年の急激な政治、経済、社会的な変化にともない、今まで疑問の余地のなかった国家という概念が揺らぎ始めている。近代的国家（国民国家）の主要要素である「国民」（国籍）や「領土」（国境）の絶対性が崩れ去り、従ってまた「主権」の所在さえもあいまいとなりつつある。特に、近年再び顕著となった地球規模の人の大量移動によっていたるところで事実上国境が無視され、その結果、複数の国を生活の場とする無国籍者（特定の国家に帰属しない者）や多国籍者（複数の国に帰属する者）が急増している。そして、今や、彼ら「越境者」との共生・共存をめざした新しい「共同体」を構想せねばならない段階に達している（cf. Castles & Davidson 2000: vii-xiii）。

本論文は、この種の国境を超えた人の大量移動が常態と化しているマレーシア・サバ州を例として、「越境者」たちとホスト社会が織り成す相互作用を、民族カテゴリーの創出ないし再編という社会文化的な適応戦略の側面から記述・分析するものである。

さて、フィリピンやインドネシアと国境を接し、またブルネイに近接するマレーシアのサバ州（世界第三の大島・ボルネオ [カリマンタン] 島北部に位置する。図1参照）では、長年にわたって人々の移動が恒常的に行われてきた。その結果もあって、言語学的に見ると、サバには少なくとも55の独自の言語を持つ言語集団ないし民族が居住するとされる。そして、これらの言語集団はそれぞれが中心となる居住地を持ち、衣食住等の生活やその他の慣習において独自の文化を維持しているものとみなされている。しかし、サバの独立前後から今日に至るまでの民族カテゴ

リーの変遷をたどってみると、これらの言語集団すべてがそれぞれ独自の民族としての地位を与えられてきたわけではない。むしろ、時の社会、政治、経済状況に応じて、言語や居住地、宗教等のさまざまな要素を組み合わせて恣意的に分類され、民族名を与えられてきた（cf. Appell 1968）。ときにはまったく新たな民族（名称）が創り出され、その名称の下に、それまで別の民族と考えられてきた複数の言語集団が統合されたりしている。すなわち、サバでは、民族は常に生成・再編されているのである。特に、近年、サバへの隣接国・地域からの多様な民族が大量に流入し、サバを居住の中心とする「先住民族」を含めたすべての民族の再編が顕著となっている。

しかしながら、サバ（ないしマレーシア）ではさまざまな制約から、民族の再編に関する直接的資料（例えば、主要民族の一部が結成している民族別政党に関する資料等）を入手することは極めて難しい¹⁾。そこで、本論文では、サバで民族別政党の役割をも担っていると考えられる民族別文化協会に焦点を当て、その設立や再編を通して間接的に民族再編の動態を記述・分析することを試みる。

以下、本論文ではまずサバにおける国境を超えた人の移動と、それに対応した民族カテゴリーの生成と再編の歴史を人口統計から明らかにする。その上で、近年の移民の流入、定着、定住化、帰化にともなった民族カテゴリーの生成ないし再編成を、民族別文化協会の設立や再編成から検討する²⁾。

1. サバの言語集団、民族と人口動態

1) 言語集団

サバの民族について述べる前に、サバに居住する言語集団を、サバにおける言語研究を長年継続している Summer Institute of Linguistics (SIL)³⁾の成果に基づいてまず確認しておきたい（図2及び図3参照）。

サバでは現在55の言語が使用され、その内33の言語がサバを居住の中心とする諸民族（本論文ではこの種の民族を暫定的に「サバの先住民」と規定しておく⁴⁾）によって使われているサバ固有の言語である。サバ固有の言語はすべてオーストロネシア語族の北西オーストロネシア上語系、



図1 サバの位置

Phylum	Super-stock	Stock	Family	Sub-family	Language	No. of dialects
1. Indo-European					Chabacano	
2. Austronesian						
	A.				Butung	
	B. Javanese Stock				Jawa TM	
		Javanese family			Jawa BT	
					Jawa TU	
		Javanese Sub-family			Jawa SN	
					Jawa LD	
	C. North-Western Austronesian Superstock				1. Lundayeh	
					2. *Banggi	
					3. *Illanun	2
					4. Suluk	
		Bugis Sub-family			Bugis TU	
					Bugis LD/SN	2
		6. Ida'an Sub-family			*Ida'an/Begahak	
					*Ida'an Sungai	4
		7. Malayic family	a. Iban			
			b. Malayic sub-family			
					Cocos Malay/ Bahasa Malaysia	
					Brunei/Kedayan	
		8. Bajau family			*West Coast Bajau	chain
					East Coast Bajau	chain
		9. Bornean Stock	a.		Tidong	chain
			b. Paitanic family		*Lingkabau	
					*Lobu	
					*Abai Sungai	
					*Tambanua	chain
					*Upper Kinabatangan	4
			c. Murutic family		1. Kolod	
					2. *Gana	
					3. *Apin-Apin Kuijau	
					4. *Kalabakan Murut	
					5. *Sembakung Murut	
					6. *Serudung Murut	
					7. *Tagai	2
					8. Central Murut Sub-family	
					*Takapan	
					*Paluan	
					*Timugon	
					*Beaufort Murut	
					*Dasun/Murut	
					*Sook Murut	
					*Baukan	
					*Nabay	
			d. Dusunic family		1. *Papar	
					2. *Dumpas	
					3. *Kadazan/ Tambanua	
					4. *Lotud	2
					5. *Bisaya	
					6. *Tatana	
					7. *Kuijau	5
					8. *Eastern Kadazan	7
					9. *Rungus	
					10. *Kadazan/Dusun	13
Total distinctions:						
2	4		12	16	36	51
					*33	83

Note: *Identifies languages whose cultural centre is considered to be in Sabah.

図2 サバの言語分類 (Regis 1989: 446-448)

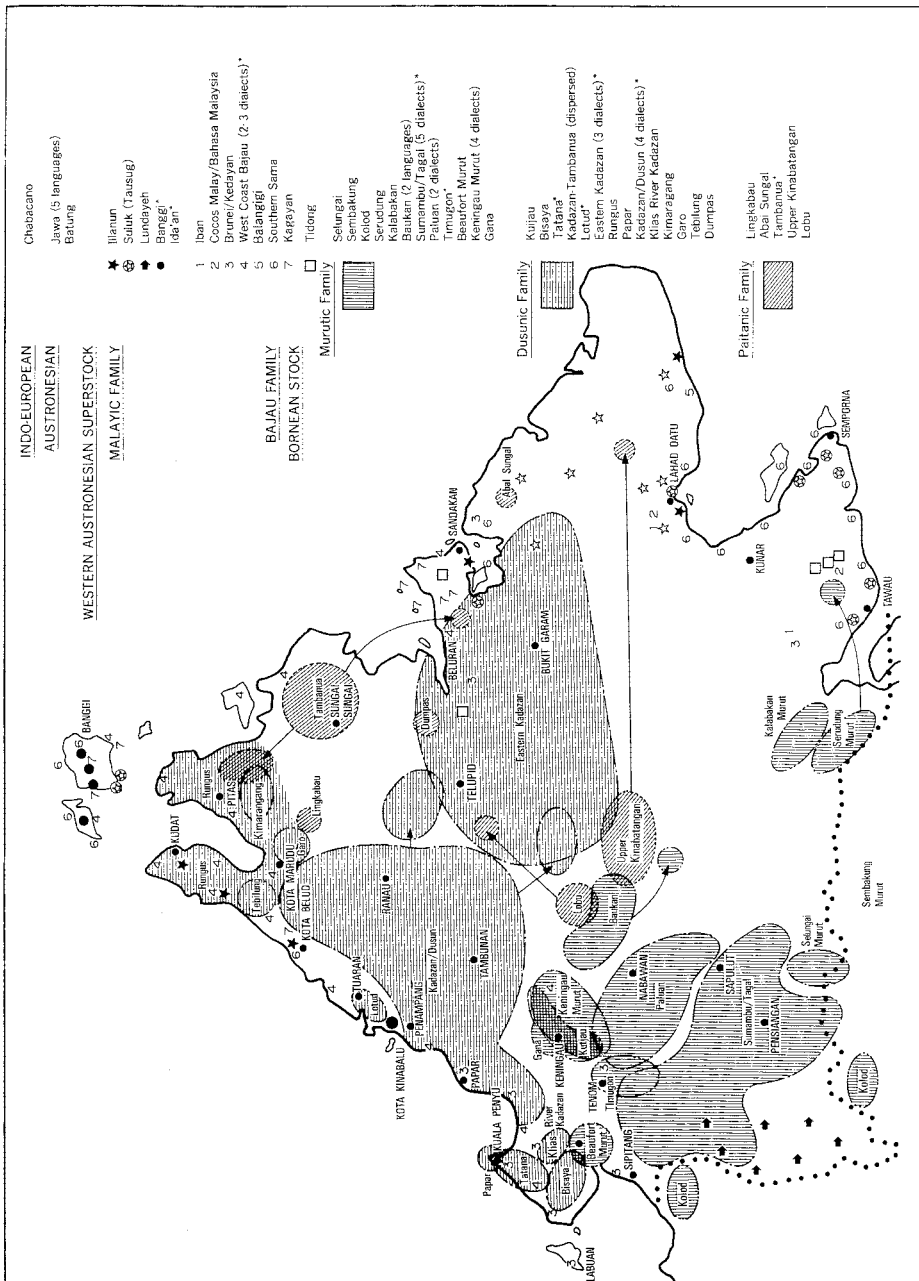


図3 サバの民族（言語集団）分布 (Regis 1989: 450)

ボルネオ語派に属す。ボルネオ語派の言語は大きくドゥスン諸語 (Dusun) とムルット諸語 (Murut), 及びパイタン諸語 (Paitan) に分けられる。

サバのボルネオ語派の中で最大の言語はドゥスン諸語である。ドゥスン諸語にはパパール語 (Papar: コタ・キナバル南西部のパパールを中心に分布), ドウンパス語 (Dumpas), カダザン / タンバナア語 (Kadazan / Tambanua), ロトゥッド語 (Lotud: 南西部のトゥアランを中心に分布), ビサヤ語 (Bisaya: 南西部のビュフォートを中心に分布), タタナ語 (Tatana), クウィジャウ語 (Kwijau: 内陸部のケニンガウを中心に分布), ラブック / キナバタンガン・カダザン語 (Labuk/Kinatangan Kadazan: ラブック / キナバタンガン河流域に分布), ルングス語 (Rungus: 北部のクダットを中心に分布), カダザン / ドゥスン語 (Kadazan/Dusun: 南西部のトゥアランを中心に分布) が含まれる。ドゥスン諸語の中では, カダザン / ドゥスン語使用者が最大の言語集団を成し, サバ西部沿岸地域から内陸部を中心に広範囲で使用されている⁵⁾。

ムルット語はサバ南部からカリマンタン北部, サラワク北東部にかけて分布している。サバのムルット諸語としてはコロッド語 (Kolod), ガナ語 (Gana), アピン・アピン / クウィジャウ語 (Apin-Apin Kuijau: 内陸部のケニンガウ北東に位置するアピン・アピンを中心に分布), カラバカン・ムルット語 (Kalabakan Murut: 南東部カラバカン河流域に分布), スンバクン・ムルット語 (Sembakung Murut: 内陸部スンバクン河流域に分布), スルドウン・ムルット語 (Serudung Murut), タガル語 (Tagal: 内陸部タガル河流域及び内陸部ナバワンを中心に分布), それに中央ムルット諸語のタカパン語 (Takapan), パルアン語 (Paluan), ティムゴン語 (Timugon: 内陸部テノムを中心に分布), ビュフォート・ムルット語 (Beaufort Murut: 西海岸ビュフォートを中心に分布), ドゥスン / ムルット語 (Dusun/Murut), スック・ムルット語 (Sook Murut: 内陸部スックを中心に分布), バウカン語 (Baukan), ナバイ語 (Nabay) がある。ムルット諸語の中では, タガル・ムルット語 (あるいはスマンプ・ムルット語 Sumambu Murut) がもっとも広範に使用されている。

パイタン諸語はパイタン河やキナバタンガン河等のサバ東部の大小河川流域の住民によって使用されている。パイタン諸語としては, リンカバウ語 (Lingkabau: 東部のスグット河支流リンカバウ河流域に分布), ロブ

語 (Lobu), アバイ・スンガイ語 (Abai Sungai), タンバナア語 (Tambanua), 上キナバタンガン語 (Upper Kinabatangan: 東部のキナバタンガン河上流域に分布) が属す。なお、パイタン諸語に属する言語を使用し、イスラーム教に改宗した人々はオラン・スンガイ (Orang Sungai: 字義通りには「河の民」、キナバタン河流域に居住) とも呼ばれる。

ボルネオ語派には、以上の諸言語の他、サバ南東部のタワウを中心に分布するティドン語 (Tidong) がある。ティドン語を使用する人々、すなわちティドン族は東カリマンタン (インドネシア) を居住の中心とし、そこからサバ南東部のタワウ周辺に移住したものと考えられている。

サバでは、以上のボルネオ語派諸語の他に、それに近い言語であるジャワ語系のジャワ語 (Jawa), ルンダイエ語 (Lundayeh), バンギ語 (Banggi), イラヌン語 (Illanun), スルック語 (Suluk), ブギス語 (Bugis), イダアン語 (Ida'an), マレー語系のイバン語 (Iban), マレー語 (Malay), ブルネイ/クダヤン語 (Brunei/Kedayan), そしてバジャウ語 (Bajau) を母語とする人々も多数居住している。この内、ルンダイエ語 (南西部シピタンを中心に分布), バンギ語 (北部ボンギ島を中心に分布), イダアン語 (南東部ラハッド・ダトゥ及び南西部コタ・ブルッドを中心に分布), イバン語 (南東部タワウを中心に分布), ブルネイ/クダヤン語 (南西部沿岸に分布) はボルネオ固有の言語とされている。しかし、同時に、これらの言語を使用する人々はいずれもサバ以外の地域、すなわち現在のフィリピンやインドネシア (カリマンタン) 等の近隣諸国や地域から移住してきたものと考えられている。したがって、これらの諸言語を使用する人々は、サバに関する限りは「先住民」ではなく、「移民」と見なされることが多い。例えば、ルンダイエ語を使用する人々、すなわちルンダイエ族はカリマンタン北部ないしサラワク東部から、比較的最近サバの南西部に移住した民族と考えられている⁶⁾。また、イラヌンやスルック、バジャウ族等はフィリピン南部から、ブギスやジャワ族はインドネシアからの移民と考えられている。

サバには多数の中国系移民が古くから住み着いている。世界周航を達成したマゼラン一行は、16世紀初頭にはすでに中国人がブルネイで船舶を建造していることを記録している。また、1850年代にはすでに多数の中国人がサバに住み、中国とサバ西海岸地域との交易がかなり確立していたという (Jones 1966:39, Lee 1965:18,19)。その後、サバを支配し

た植民地政府は中国人移民をプランテーション労働者や農民として移住させることを一貫して奨励したため、中国人移民の数は増加していった。サバの中国移民及びその子孫としては、客家（Hakka）が最大で、広東人（Cantonese）、福建人（Hokkien）、潮州人（Teochew）、海南人（Hainanese）の順でそれに次ぐ。

数は少ないながら、サバにはインド系移民も居住し、彼らの大多数はタミール語を使用している。

2) 民族分類

さて、サバでは、以上のような言語集団が居住地域や出身地域・国等に応じて歴史的にさまざまに分類され、個別の民族名を与えられてきた。サバの歴代の人口統計で使用された民族名を、1800年代後半から10年ないし20年ごとに列挙したものが表1である（表1参照）。

表1をもとに、民族分類の特徴を以下に挙げておく。

表1から明らかなように、サバの民族分類は必ずしも言語集団の分類と一致していないことがわかる。例えば、1991年の統計には、サバの先住民族としては、カダザン族とドゥスン族、バジャウ族、ムルット族の名しか挙げられていない。これに対し、1980年の統計では20余の民族名が挙げられている。だが、そこでも、ドゥスン諸語に属する言語集団（民族）が比較的細かく分類されているのに対し、ムルット諸語やパイタン諸語に属する言語集団（民族）の分類は大まかなものに過ぎない。

また、上記の点に関連し、第二の特徴として、民族の分類の仕方が歴史的に変化していることが指摘される。例えば、1951年の統計では、ドゥスン族（Dusun）の名が挙げられているが、1970年には消え、代わりにカダザン族（Kadazan）が登場する。1980年になるとカダザン族は他の先住民族とともにプリブミ（*pribumi*：インドネシア語で「原住民」を意味する）というカテゴリーの中に入れられている。1991年にはドゥスン族が復活し、カダザン族とともにブミプトラ（*bumiputera*：マレーシア語で「土地の子」、すなわち「先住民」を意味する）カテゴリーに一括されている。

このように民族分類が言語の分類と一致せず、歴史的に一定していないのは、一つには、言語集団、従ってまた、民族集団間の境界が必ずしも明確でないことが考えられる。サバに住む中国系住民とインド系住民

の間では人種的にはもちろん、言語や文化の面からも民族の境界は明瞭である。しかしながら、サバの場合、特にボルネオ語派に属する諸言語を使用する民族に関しては、言語が似通っていることもあり、民族間の境界は必ずしも明確ではないのである。

民族間の境界が不明瞭となる他の要因としては、カダザン/ドゥスン族と中国系住民の間のように、あるいはバジャウ族やイラヌン族、マレー人之間のように、同一ないし似通った宗教や食習慣を持った民族の間で通婚が一般化し、混血が進んでいることが挙げられる。この種の混血の結果、多数の人が時と場所に応じて複数の言語を日常的に使い分け、その結果複雑な民族アイデンティティーを持つことになる。

さらに重要なことは、サバではただ単に言語の側面からだけでなく、時として、社会や政治、経済的な状況に応じて民族カテゴリーが変更され、民族への帰属もそれに依拠して恣意的に選択されることが指摘される。言葉を換えて言うと、サバでは、社会や政治、経済的文脈で民族カテゴリーが創出・再編成され、それに依拠して自らの民族帰属を変更することが可能なのである。

3) 人口動態

ここでさらに、サバにおける最近の民族ないし国籍別人口動態を簡単に確認しておきたい⁷⁾。というのは、サバでは移民ないし越境がきわめて活発で、民族や国籍別人口の動態がサバの民族分類や文化協会の生成・再編成に大きな影響を与えていると思われるからである。

Kurus (1998) は、サバにおける人の大量移動を植民地化以前から継続して見られるものとして、以下の4つのタイプに分類している。すなわち、1) 植民化以前に見られた無制限の島嶼間の「渡り」、2) 植民地期の英国による外国人労働者の「移入」、3) 1970年代のフィリピン南部からのイスラーム教徒難民の「脱出」、4) 1950年代以降1980年代初頭までのゴム、木材景気下の継続的な労働力の流入である。

サバにおける最近の人口動態は、1991年の人口統計に詳しい (*Population and Housing Census of Malaysia 1991*)⁸⁾。その統計によると、サバ州の総人口173万4685人の内、42万5175人(24.5パーセント)がインドネシア国籍やフィリピン国籍を持つ「外国人」(non-Malaysian citizen)であるという(表2参照)。「外国人」の内、6割近く(23万7009人、55.7

表1 人口統計に見るサバの民族分類の変遷

1891	1901	1911	1931
British	Europeans	Europeans	British
Other Europeans	Eurasians	Eurasians	Australian
Eurasians	Chinese	Chinese	English
Africans and Arabs	Japanese	Japanese	Irish
Native of Northern India	Siamese	Siamese	New Zealander
Native of Southern India	Arabs	Arabs	Scotch
Siamese and Kalantan	Malays	Sundanese	Europeans
Malays	Native of India	Somali	Austrian
Brunei Malays	Natives of Netherlands	Philippines	Dutch
	India	Malays	German
Banjermassin Malays	Natives of Sundanese	Native of India	Spanish
Javanese	Archipelago	and Ceylon	French
Bugis and Tidong Men	Native of Borneo	Native of Netherlands	Italian
Dyaks	Bajau	East Indies	Americans
Dusuns, Murut, Kadayans,	Brunei	Natives of Sulu	Eurasians
Bisayahs, etc.	Dusun	Archipelago	Africans
Bajows	Dyak	Bajaus	Arabs
Sulu	Idahan	Brunei	Chinese
Manilla	Ilanun	Dusuns	Cantonese
Chinese	Kedayan	Dyaks	Hailam
Japanese	Murut	Idahan	Hakka
Not Recorded	Orang Sungei	Ilanun	Hokkien
	Orang Padas	Kedayan	Shantung
	Sarawak Malay	Muruts	Tchow
	Tangaras	Orang Padas	Unspecified
	Tutong	Orang Sungei	Indians
		Tagals	Ceylonese
		Tanbunwa	Padan
		Tidongs	Sikh
		Tutong	Tamil
			Others
			Jews
			Japanese
			Malay Races
			Dyaks
			Nethretland East Indians
			Peninsular and Othres
			Philippine Islanders
			Siamese
			Natives of Borneo
			Bajau
			Land Bajau
			Sea Bajau
			Ilanun
			Brunei
			Brunei
			Besaya
			Kedayan
			Tutong
			Dusun
			Dusun
			Budulupi
			Idahan
			Kuwijau
			Orang Sungei
			Tanbunwa
			Murut
			Murut
			Peluan
			Tagai
			Tenggara
			Timugon
			Sulu
			Sulu
			Tidong

1951 (1960*)	1970	1980	1991
European	Kadazan	Pribumi	Malaysian Citizens
European	Kadazan	Kadazan	Bumiputera
Eurasian	Kwijau	Kwijau	Malays
Dusun	Murut	Murut	Dusun
Dusun	Bajau	Bajau	Kadazan
Kwijau	Bajau	Illanun	Bajau
Murut	Illanun	Lotud	Murut
Bajau	Malays	Rungus	Other Indigenous
Bajau	Other Indigenous	Tambanuo	Chinese
Illanun	Lotud	Dumpas	Indonesian
Other Indigenous	Rungus	Marangang	Others
Brunei	Tambanuo	Paitan	Non-Malaysian Citizens
Kedayan	Dumpas	Idahan	
Orang Sungei	Marangang	Minokok	
Bisaya	Paitan	Rumanau	
Sulu	Idahan	Mangka'ak	
Tidong	Minokok	Sulu	
Sino-Native	Ramanau	Orang Sungei	
Chinese	Mangka'ak	Brunei	
Hakka	Sulu	Kedayan	
Cantonese	Orang Sungei	Bisaya	
Hokkien	Brunei	Tidong	
Teochew	Kadayan	Other Indigenous	
Hailam (Hainanese)	Bisaya	Malay	
Other Chinese	Tidong	Indonesian	
Others	Sino-Native	Sino-Native	
Native of Sarawak	Others	Native of Sarawak	
Malay	Chinese	Native of Philippines	
Cocos Islander	Hakka	Cocos Islander	
Indonesian	Cantonese	Chinese	
Indian, Pakistani, Ceylonese	Hokkien	Hokkein	
Native of Philippines	Teochew	Cantonese	
Others	Hainanese	Hakka	
	Others	Teochew	
	Indonesians	Hainanese	
	Others	Other Chinese	
	Sarawak	Indian	
	Filipina	Indian/Pakistani/ Bangladeshi/Sri Lankan	
	Indonesian	Others	
	Europeans	Vietnamese	
	Eurasians	Other Asian	
	Indians	Eurasian	
	Cocos	European	
	Others		

*1960年の統計はDusunをDusunとKwijauに分けていない場合は、すべて1950年の統計に同じ。

表2 サバ洲の国籍別人口 (1991年)

Malaysian Citizens	1,309,510 (75.5%)
Non-Malaysian Citizens	425,175 (24.5%)
Total	1,734,685 (100%)

表3 サバ在住外国人の国籍と出生地

Nationalities/Birthplace	in Ma'sia (Sabah)	outside Ma'sia	Unknown	Total
Indonesian	39,097 (38,279)	187,236	909	227,242
Filipino	38,672 (38,492)	149,774	883	189,329
Singaporean	618 (579)	573	6	1,197
Bruneian	62 (52)	177	0	239
Thai	41 (26)	102	0	143
Others	528 (437)	4,334	50	4,912
Total	79,018 (77,865)	342,196	1,848	423,062

* in the 1991 Census, nationality is not specified.

表4 サバ在住マレーシア人の出生地

in Malaysia	
Sabah	1,255,524
outside Sabah	55,904
	<hr/>
	1,262,428
outside Malaysia	
Singapore	553
Indonesia	19,922
Philippines	11,718
Thailand	87
Brunei	664
Vietnam	265
China	4,722
India/Pakistan	
Bangladesh/Sri Lanka	988
Other Counties	1,961
	<hr/>
	40,880
Unknown	4,728
	<hr/>
	1,307,036

パーセント)は男性で、残りの4割(18万8166人, 44.3パーセント)は女性である。1998年半ばには、サバ州の総人口281万2900人の内、82万3100人(29.3パーセント)が「外国人」と推定されており、サバ州在住外国人の数はさらに増加している(*Monthly Statistical Bulletin Sabah, June 1998*)。

サバ州在住「外国人」は主にインドネシア人とフィリピン人である。1991年の人口統計によると、42万5175人の「外国人」の内、インドネシア人が22万7242人(53.4パーセント)で、フィリピン人が18万9329人(44.5パーセント)を占めている。彼ら「外国人」は大多数が出生後サバにやって来ているが、7万7865人(18.4パーセント)にも上る多数の者がサバで生まれていることは注目に値する(表3参照)。つまり、出生地という点で考える限り、彼らはマレーシア人になる要件を満たしつつあると言える。また、マレーシア国籍(マレーシア市民権)を有する130万9510人の内少なくとも4万880人(3.1パーセント)が国外の生まれで、その大多数がインドネシア(1万9922人)やフィリピン(1万1718人)生まれであることを考えると(表4参照)、インドネシアないしフィリピンから流入した「外国人」は徐々にだが確実に「マレーシア人」になりつつあると言うことができよう。

以上要するに、サバでは、19世紀半ばの北ボルネオ特許会社の統治時代から一貫して国外からの移民を労働力として積極的に受け入れてき

た。そして、近年、特にインドネシアやフィリピンからの移民が大量に流入していることが窺える。しかも、こうして流入した移民たちは時として非法に、しかし着実かつ徐々にマレーシア国籍を取得しつつあり、その数はますます増えているように思われる⁹⁾。

3. 文化協会

1) 協会法

マレーシアでは、「協会法」(Societies Act, 1966) および「協会規則」(Societies Regulations, 1984) に基づき、設立目的や趣旨、一時的か永続的かのいかなを問わず、7名以上の会員を有するあらゆるクラブ、団体、協会は連邦政府の協会登録局で登録しなければならない。本法令に基づき、マレーシアでは、政党をはじめ宗教や福祉、慈善、親睦、友好、文化、スポーツ、教育、青少年、婦人等に関連したすべての団体・組織が一元的に連邦協会登録局で管理されている¹⁰⁾。

登録局を統括する内務大臣及び協会登録局局长は、協会創設の申請を審査し登録の許可権を持つ。認可された協会に対しては、協会登録局から登録証が発行される (cf. *Panduan Pendaftaran Pertubuhan*)。連邦協会登録局は州ごとに支局を置き、支局长を派遣している¹¹⁾。サバ州では、州都コタ・キナバルに連邦協会登録局の支局が置かれている。そして、サバ州内に本部を置くすべての当該団体は、コタ・キナバルに設置された協会登録局サバ支局で登録等の手続きを取らなければならない。

協会登録局支局では、申請がなされた協会の名称や設立趣旨、協会長や幹事、会計等の名簿、組織全体や支部に関する必要情報を協会ごとにファイルして保管している¹²⁾。設立を認可された協会は、年次総会(ないしはそれに代わるもの)の開催から28日以内に、総会の議事録を含めた報告書を毎年協会登録局支局に提出する義務がある(「協会法」第14条第1節)。また、協会名や協会の綱領、事務所の所在地を変更する場合や、新たに支部を設立する場合には協会登録局から事前に許可を得なければならない(「協会法」第11条及び同法第12条第1節)。これら諸義務の遂行を怠った場合には、最終的には協会としての登録を抹消される (cf. *Panduan Pendaftaran Pertubuhan* 4-5; *Panduan Pindaan Undang-Undang Pertu-*

buhan Berdaftar 》

政党や宗教団体、慈善団体等あらゆる団体の情報は協会登録局に一元的に保管されているがゆえに、ファイルの閲覧にはさまざまな制約が課されている¹³⁾。政党や宗教団体のファイルの閲覧には特に厳しい制限が加えられている。これに対し、文化協会に関するファイルはある程度閲覧が可能であった。次節で述べる民族別文化協会の概要は、主に協会登録局サバ支局に保管されていたこの種のファイルに基づく。ただし、文化協会のファイルに関しても、登録局と当該協会の往復書簡（特に登録の抹消理由等に関する書簡類）や会計等に関する情報等は閲覧が制限された¹⁴⁾。

2) 民族別文化協会

サバにおける民族名を冠した文化協会は概ね、民族固有の言語や伝統音楽・工芸・装束等の伝統文化を保存し、振興することを第一義としている。しかしながら、サバの民族別文化協会は時に応じて、特に州議会選挙や連邦議会選挙の前後には、民族を代表する候補者の支持母体として政治的役割を担うところにその特異性がある。この点については後で詳しく述べることとし、ここではまず、サバに現存している文化協会の概要を述べておきたい。

協会登録局サバ支局から提供されたリストによると、1999年現在サバには少なくとも86の文化協会が存在していた¹⁵⁾。その中で、民族ないし出身地の名称を冠した民族別文化協会をアルファベット順にまとめたものが表5である（表5参照）。

さて、表5をもとにして民族別文化協会の一般的特徴を挙げておきたい。

第一の特徴として、サバに居住する主要民族はすべて文化協会ないし文化振興を目的とする協会を持つということを挙げねばならない。サバの主要民族であるカダザン族ないしドゥスン族は、サバ・カダザンドゥスン文化協会（Kadazandusun Cultural Association, Sabah:KDCA）と統一サバ・ドゥスン協会（United Sabah Dusun Association:USDA）を、バジャウ族は、サバ・バジャウ芸術協会（Persatuan Seni Budaya Bajau Sabah）を持つ¹⁶⁾。また、彼らに次ぐムルット族は、統一ムルット・サバ協会（Persatuan Sabah Murut Bersatu）とサバ・ムルット文化協会（Per-

表5 サバの民族別文化協会（1999年6月現在）

Ethnic Group	Registered Name	Date of Registration	Address Of Head office	Number of members	others
Bajau	Per. Bajau Sabah (Change of name to The United Sabah Bajau Association) Per. Keb. dan Kesentian Bajau Sabah Change of name to Per. Seni Budaya Baja Sabah Per. Masyarakat Bajau/Ubian Sabah	07/07/64	KK (Kota Kinabalu)	5,000	President: Matsah Salleh (Political Secretary) Biennial Bajau Conference
(Ubian) (Samah)	Per. Samah Kota Belud	07/03/97	KK		
Bisaya	Per. Bisaya Bersatu Sabah	25/03/98	Kota Belud	5,670	President: Datuk Lajim Hj. Ukin (State Minister)
Brunei	Per. Brunei Komasyarakak Sabah (Change of name to Per. Masyarakat Brunei Sabah?)	27/09/93	KK	1,036	President: Mohd. Hussein Mohd. Tahir Nasiruddin (Executive Manager, SEDCO)
Bugis	Per. Kbjkn. Bugis Sabah	01/07/85	KK	18,496	President: Osman Jamal (Director, Dept. of Land and Survey)
Cocos Islander	Pert. Pergerakan Masyarakat Cocos Pantai Barat Sabah	09/04/97	KK		
Dayak Iban	Per. Dayak Iban Sabah				Registered by 1989 Unregistered by 1999 President: Kalikau Untol
Dusun	Per. Dusun Sabah Bersatu (United Sabah Dusun Association;USDA)	05/07/65	Sinsuran, Tuaran?		
	Per. Kbjkn dan Keb. Dusun Lotud Tuaran	28/03/95	Kota Belud		
	Per. Dusun Imagas Sabah	28/03/96	??		
	Per. Penulis Dusun Sabah		KK		
	Per. Keb. Pasok Nomuk Raigang Bersatu (Pasok)	02/12/78	KK		
Gama, Kujjau, Naabai	Per. Keb. dan Kbjkn Suku Kaum Gama, Kujjau dan Naabai Keningau	04/11/93	Keningau		
Gama	Per. Masyarakat Gama Sabah	06/12/95	Keningau		
Idhnan	Pert. Kbjkn Iduhan Pewaris Madai Iduhan Datu	27/02/98	KK?		
Iramun	Per. Bumiputera Iramun Sabah	09/10/78	KK	78	Pandikar Amin Mulia (President of AKAR; Federal Minister)
Jawa	Per. Keb. dan Kbjkn Jawa Sabah	07/03/96	KK		

表5 (前頁より続く)

Kadazandusun	Per. Keb. Dusun Kadazan Sabah (Kadazandusun Cultural Association : KDCA)	29/10/64	Penampang	18,417	Pairin Kitingam (President of PBS) KDI (Koisam Cultural Development Institute) KDLF (Kadazandusun Language Foundation) INDEP(Institute for Indigenous Economic Progress, Sabah)
Kedayan	Yayasan Kadazani/Dusun Kinabalu Sabah	03/02/94	KK		
Kegayan	Per. Keb. dan Kbjkn Kadazan Sandakan	30/11/93	KK?		Needs to re-register
Kimaragang	Per. Kegayan Sabah	22/09/94	Kudat		
	Per. Kimaragang Bersatu Sabah		KK		
Lundayeh	Per. Keb. Lundayeh Sabah	23/06/93	Sipitang	284	President: Ricky Yakub Ganang (Deputy Manager of SAFODA)
Melayu	Per. Kebjkn Anak Melayu Semenanjung Wilayah Persekutuan Labuan		KK		
	Per. Kemasyarakatan Melayu Jawau	18/04/92	Tawau		
	Badan Kebjkn Anak-Anak Semenanjung		KK		
	Badan Kebjkn Anak-Anak Perak		KK		
Minangkabau	Per. Pencak Silat Minangkabau Kota Kinabalu	28/10/75	Keningau		
Murut	Per. Sabah Murut Bersatu	16/04/97	Tenom		
	Per. Keb. Murut Sabah		Keningau		
Orang Sungai	Yayasan Murut Sabah		Sandakan		
	Per. Bangsa Sungai Sabah	26/07/79	Sandakan		
	Per. Orang Sungai Labuk Sugut, Beluran	22/01/91	Sandakan		
Rungus	Per. Momogun Rungus Sabah	03/12/92	Kudat		
	Kelab Kbjkn Masyarakat Rungus Kota Kinabalu	19/08/95	KK		Needs to re-register
Rondon	Per. Adat Istiadat Suku Kaum Rondon Momogun, Sabah				Registered by 1989. Unregistered by 1999.
Momogun	Per. Keb. Dan Kbjkn Kaum Simumul dan Sibutu Semporna	16/04/94	Semporna		
Sibutu	Per. Keb. Suluk Badjao Sabah	27/09/93	KK		Needs to re-register
Suluk/Badjao	Per. Kbjkn Keluarga TR(Thassam Rasidam) Kunak	15/04/99	Kunak		
Thassam					
Rassidam					
Tidong	Per. Tidong Sabah	28/03/90	Sandakan	63	President: Mohd. Kamsah Asah (Businessman)
Tobiling	Per. Tobiling Bersatu Sabah	29/11/88	Kota Marudu	2,000	President: James Sigoh (Executive Officer, Nabawan/Pensiangan District Council)
Toraja	Per. Toraja Sabah	22/04/97	Tawau		

表5 (前頁より続く)

Chinese	Per. Keh. Cina Sabah	23/02/80	KK	Tan Pho Hing Chao Tek Onn Sponsor of Dragon Boat Race (every June)
	Per. Cina Utara Sabah Kinabalu		Penampang KK	
	Persekutuan Per. Cina Tawau		Tawau	
	Per. Cina Bersekutu Tawau		Tawau	
	Per. Chung Hwa Kota Belud		Kota Belud	
	Per. Penulis Cina Sabah	21/11/94	Luyang, KK?	
	Per. Kbjkn Cina Penampang		Penampang	
	Per. Kbjkn Orang Cina Tuaran		Tuaran	
(Foochow)	Per. Foo Chow Kota Kinabalu		KK	
	Per. Foo Chow Labuan		Labuan	
	Per. Foo Chow Sandakan		Sandakan	
	Per. Foo Chow Tawau		Tawau	
	Gabungan Per. Hainan Sabah		Sandakan	
(Hainan)	Per. Hainan Sabah		Sandakan	
	Per. Hainan Kota Kinabalu		KK	
	Per. Hainan Kudat		Kudat	
	Per. Hainan Lahad Datu		Lahad Datu	
	Per. Hainan Tawau		Tawau	
(Hakka)	Gabungan Per. Hakka Sabah		KK	
	Per. Hakka Beaufort		Beaufort	
	Per. Hakka Keningau		Keningau	
	Per. Hakka Kota Kinabalu		KK	
	Per. Hakka Kudat		Kudat	
	Per. Hakka Daerah Papar		Papar	
	Per. Hakka Daerah Ranu		Ranu	
	Per. Hakka Daerah Tuaran		Tuaran	
	Per. Hakka Lahad Datu		Lahad Datu	
	Per. Hakka Sandakan		Sandakan	

表5 (前頁より続く)

(Hokkien)	Per. Hakka Tawau	Tawau		
	Per. Hakka Tenom	Tenom		
	Per. Hakka WP Labuan	Labuan		
	Gabungan Per. Hokkien Sabah	KK		
	Per. Hokkien Beaufort	Beaufort		
	Per. Hokkien Kota Kinabalu	KK		
	Per. Hokkien Kudat	Kudat		
	Per. Hokkien Lahad Datu	Lahad Datu		
	Per. Hokkien Papar	Papar		
	Per. Hokkien Sandakan	Sandakan		
	Per. Hokkien Tamparuli	Tamparuli		
	Per. Hokkien Tawau	Tawau		
	Per. Hokkein Tenom	Tenom		
	Per. Muzik Kamotnis Cheong Hung KK	KK		
	Persatuan Per. Teo Chew Sabah	Sandakan		
	Per. Teo Chew Kota Kinabalu	KK		
	Per. Teo Chew Labuan	Labuan		
	Per. Teo Chew Lahad Datu	Lahad Datu		
	Per. Teo Chew Sandakan	Sandakan		
	(Canton) (Teochew)	Kelab Muzik Teo Chew Sandakan	Sandakan	22/12/54
Per. Teo Chew Tawau		Tawau		
Kelab Muzik Teo Chew Tawau		Tawau	19/09/68	
Per. India Sabah		KK		
Per. India Resideni Kenangan		Kenangan		
Per. India Sandakan		Sandakan		
Per. India Tawau		Tawau		
Per. India WP Labuan		Labuan		
Kelab Jepun Kota Kinabalu		Tunran		
Per. Bumiputera Bersatu Sabah		Sandakan	25/07/92	
Japanese Others	Per. Kebudayaan Bumiputera Sabah			Registered by 1989. Unregistered by 1999?
	United Sabah Pernakan Association			Unregistered by 1989. Unregistered by 1999.
	Badan Kbjkn. Warisan Nusantara Sabah	KK	16/04/97	
	Per. Masyarakat Desa Sabah	KK	25/07/91	106
	Badan Kbjkn Anak-Anak Semenanjung	KK		
	Badan Kbjkn Islam Sabah	KK		
	Yayasan Islam Sabah	KK		
	Per. Perhimpunan Kbjkn Bumiputera Sabah	KK	02/03/98	

Sources: Files at the Federal Department of Registration of Societies, Sabah Branch.

satuan Kebudayaan Murut Sabah) を持ち、イラヌン族はサバ・イラヌン・ブミプトラ協会 (Persatuan Bumiputera Iranun Sabah), ビサヤ族はサバ統一ビサヤ協会 (Persatuan Bisaya Bersatu Sabah) を有している。

第二の特徴は、文化協会設立の時期が1960年代半ばと1970年代半ば、および1990年代初頭から半ばの三つの時期に集中しているということである。

1960年代半ばには、サバ・カダザン・ドゥスン文化協会(1964年創設)や統一サバ・ドゥスン協会(1965年)、サバ・バジャウ協会(1964年)という主要な民族の協会が設立されている。1970年代半ばになると、以上の主要民族に次ぐ民族の文化協会、すなわちサバ・イラヌン・ブミプトラ協会 (Persatuan Bemiputera Iranun Sabah. 1978年)と統一ムルット・サバ協会(1975年)が設立されている。また、1990年代初頭から半ばにかけては、サバ・バジャウ/ウピアン大衆協会 (Persatuan Masyarakat Bajau/Ubian Sabah. 1997年)、サバ大衆ブルネイ協会 (Persatuan Brunei Kemasyarakatan Sabah. 1993年)、サバ・ティナガス・ドゥスン協会 (Persatuan Dusun Tinagas Sabah. 1996年)、サバ西海岸ココス島民大衆行動組織 (Pertubuhan Pergerakan Masyarakat Cocos Pantai Barat Sabah. 1997年)、ケニンガウ・ナアバイ・クイジャウ・ガナ文化福祉協会 (Persatuan Kebudayaan dan Kebajikan Suku Kaum Gana, Kuiu dan Naabai Keningau. 1993年)、サバ・ジャワ文化福祉協会 (Persatuan Kebudayaan dan Kebajikan Jawa Sabah. 1996年)、サバ・クダヤン協会 (Persatuan Kedayan Sabah. 1993年)、サバ・ルンダイエ文化協会 (Persatuan Kebudayaan Lundayeh Sabah. 1993年)、コタ・キナバル・ルングス大衆福祉協会 (Kelab Kebajikan Masyarakat Rungus Kota Kinabalu. 1995年)、スンボルナ・シムヌル・シプトウ文化福祉協会 (Persatuan Kebudayaan dan Kebajikan Kaum Simunul dan Sibutu Semporna. 1994年)、サバ・バジャオ・スルック文化協会 (Persatuan Kebudayaan Suluk Badjao Sabah. 1993年)、サバ・トラジャ協会 (Pertubuhan Toraja Sabah. 1997年)等が設立されている。

ここで、以上の三期にわたる民族別文化協会の設立ラッシュの社会・政治的背景を述べておきたい。

1960年代半ばの文化協会の設立ラッシュは、サバがマレーシア連邦に加入して独立した1963年にほぼ重なり、サバの主要民族が独立直後

に相次いで民族ごとの協会を設立したことがわかる¹⁷⁾。一方、1970年代半ばの設立ラッシュは、主要民族に次ぐ諸民族が民族ごとの協会を設立したためである。1990年代初頭から半ばの文化協会設立ラッシュは、マレーシア連邦政府の与党連合・国民戦線（Balisan Nasional：BN）が、サバ州政権をサバ統一党（Parti Bersatu Sabah：PBS）から奪還した前後の時期である。この時期の設立ラッシュは、一つには主要民族の文化協会が地域や下位集団ごとの協会に細分化したためである（例えば、サバ・ティナガス・ドゥスン協会やサバ・バジャオ・スルック文化協会等の設立）。それとともに、それまで自前の協会を持っていなかった移民や帰化民たちが自分たちの文化協会を設立した結果（例えば、サバ・バジャウ/ウピアン大衆協会やスンボルナ・シムヌル・シプトゥ島民文化福祉協会等の設立）だと思われる。

リー（Lee 1976:37）によると、1960年代半ばの文化協会の設立ラッシュは、サバに居住する中国系住民が中華商会や出身地ないし方言集団ごとの公会、中華学校、各種のクラブを再建し始めたことに対する非中国系住民たちの対応であったという。第二次世界大戦中の日本軍政時代、中華商会や公会は解散させられたが、戦後、中国系住民は閉鎖された商会や公会を徐々に再建していった。中国系住民が商会や公会等の再建を通して大同団結する中で、非中国系住民たちもこれに対抗するかたちで民族ごとの文化協会を設立していったのが、1960年代半ばの文化協会設立ラッシュだということである。これに対し、プア・キティンガン（Pugh-Kitingan 1989:367）はリーの見解を大筋では認めつつ、当時の文化協会の設立ラッシュには、非中国系住民たちのあいだで芽生えた、自発的な文化復興運動という側面があったことも見逃せないことを指摘している。

1970年代半ばの文化協会設立ラッシュは、サバ州政権がマレー化政策を強引に進めた「独裁的」政権から、民主的多民族政党に移行した時期にほぼ重なる。サバ州政権は、独立後しばらくして、マレー・ムスリム系住民を中心とした統一サバ国民組織（United Sabah National Organization: USNO）によって握られた。USNOはキリスト教徒が多数を占めるカダザン族やドゥスン族の意向を無視してイスラーム教をサバ州の宗教としたり、独立後も英語の使用が保証されていたにもかかわらず突然マレー語を公用語にするなど、急激なマレー化政策を断行していった。

そして、USNOの党首にしてサバ州の首席大臣であったムスターファ（Mustapha bin Harun）が独断専行によってマレーシア連邦からの離脱・独立をも示唆するに至り、連邦政府および連合与党・国民戦線がUSNOを見限った。その結果、USNO政権は1976年に瓦解した。USNOに代わってサバ州の政権を握ったのは、マレー・ムスリム系住民だけでなく、カダザン族やドゥスン族、中国系住民等のさまざまな民族が参画したサバ初の多民族政党・サバ大衆団結党（Bersatu Rakyat Jelata Sabah：BERJAYA）であった。このとき、カダザン族やドゥスン族、バジャウ族等の主要民族ばかりでなく、それに次ぐムルット族やイラヌン族等も参集して独自の文化協会を設立し、それを通して政治的発言力を獲得していった。それが、1970年代半ばに見られた第二期の文化協会設立ラッシュであった。

1990年代半ばの文化協会の設立ラッシュも、サバ州の政治的変革に対応している。1970年代半ばにサバ州政権を握ったBERJAYAは、当初こそキリスト教徒が多数を占めるカダザン族やドゥスン族、中国系住民の利益を擁護した。だが、バジャウ族等のマレー・ムスリム系住民を中心とした政権であったため、1980年代初頭から徐々に連邦政府の意向に従ったマレー化政策を進めてゆき、カダザン族やドゥスン族たちの支持を失った。そして、1985年には、今度はカダザン族やドゥスン族を中心とした多民族政党であるサバ統一党（Parti Bersatu Sabah：PBS）に取って代わられることとなった。

PBSは当初、連邦政府与党連合である国民戦線（BN）にも加わり、PBSが政権を担うサバ州政治も安定していた。しかしながら、1980年代末になると、サバ住民の利益擁護を優先するあまり、PBSは連邦政府、なかんずく与党連合・国民戦線の中核を成す統一マレー国民組織（United Malays National Organization：UMNO）と1990年に決別し、サバ州政権にはわかに不安定となった。その結果、1994年に、10年近く続いたサバのPBS政権は崩壊し、マレー・ムスリム系住民を中心とした、連邦与党・国民戦線主導の州政権が誕生した。この時期は、フィリピンやインドネシア等、サバの隣接地域・国から、大量のマレー・ムスリム系移民労働者が合法的ないし非合法的にサバに流入・定着し始めた頃と重なっている。1994年のサバ州政権の交代期、従ってまた各種の権益の再配置に際し、既存の民族別文化協会は地域ごとにさらに細分化

して文化協会を設立した。一方、フィリピンやインドネシア移民ないしは帰化民は、彼らの民族名や地域名を冠した文化協会を設立して権益の再配分に与ろうとした。この種の動きが、1990年代初めから半ばに至る第3期の文化協会創設ラッシュをもたらしたと思われる¹⁸⁾。

さて、文化協会に見られる第三の特徴として、民族ごとの主要文化協会の会長が、現行のサバ州政権、ないしそれに先立つPBS時代の閣僚や有力政治家であることを挙げねばならない。例えば、サバ・カダザンドゥスン文化協会の会長はPBSの党首で、かつてはサバ州首席大臣であったパイリン・キティガン(Pairin Kitingan)である。また、サバ・バジャウ芸術文化協会の会長は元サバ州首席大臣のサレ・サイド(Salleh Said)で、イラヌン・プミプトラ協会の会長はサバ州政府およびマレーシア連邦政府の閣僚を歴任したパンディカール・アミン(Pandikar Amin Mulia)、サバ中華文化協会(Perstuan Kebudayaan Cina Sabah)の会長もサバ州政府の閣僚を務めたチャオ・テック・オン(Chao Tek Onn)である。これらの事実から、先に述べた文化協会の設立ラッシュが、サバ州の政権が交代し利益の再配分が期待される「政治の季節」と一致していたことが容易に理解できるであろう。

以上に概略を述べた民族別文化協会の設立は、サバ州の社会・文化動態を考える上でいったいいかなる意味を持つのか。次章では、主要な民族別文化協会の創設と変遷をやや詳しく述べ、民族カテゴリーの生成や再編との関係を明らかにしてみたい¹⁹⁾。

4. 主要文化協会の設立と変遷

サバの主要民族がカダザンドゥスン族(ないしカダザン族あるいはドゥスン族)²⁰⁾とバジャウ族、ムルット族であるということに関しては異論はなかろう。そこで、ここでは、これらサバの主要民族を中心にして、それら民族と離合集散を繰り返しつつあるピサヤ族やイラヌン族等の文化協会等について、協会設立の経緯や目的、再編等の概略を示しておきたい²¹⁾。

1) サバ・カダザンドゥスン文化協会

サバ・カダザンドゥスン文化協会はサバの主要民族の一つであるカダ

ザンドゥスン族ないしカダザン族，あるいはドゥスン系諸民族を協会員とする文化協会である。英語名を Kadazandusun Cultural Association, Sabah (KDCA)，マレー語名を Persatuan Kebudayaan Kadazandusun, Sabah，カダザンドゥスン語名を Koisaan Koubasanan Kadazandusun, Sabah (KOISAAN) という。通常，英語名の略称である KDCA またはカダザンドゥスン語名の略称である KOISAAN として知られている。現協会長はサバ統一党 (PBS) の党首でもある Joseph Pairin Kitingan である。

KDCA は非政治団体で，サバ全土の 40 のカダザン・ドゥスン系民族を傘下に擁するサバ最大の文化協会である²²⁾。現在の KDCA は，1966 年 4 月 29 日に登録された。しかし，KDCA の歴史はそれよりも古い。KDCA の前身は，1953 年 (独立の 10 年前) に，サバの州都コタ・キナバル (当時はジェッセルトンと呼ばれていた) 近郊のプナンパンで，カダザン協会 (Society of Kadazan) として設立された。カダザン協会はカダザン語の普及を図るなど伝統文化の保護や振興を目的としていたが，徐々に，カダザン / ドゥスン系諸民族の利益を中国系住民やマレー・ムスリム系住民から守るという「カダザン・ナショナリズム」を称揚する政治的団体の性格を強めていった²³⁾。1963 年のサバの独立時にはその目的がある程度達成されたので，カダザン協会は専ら文化振興を目的としたサバ・カダザン文化協会 (Kadazan Cultural Association Sabah : KCA) に発展・解消した。

ところで，カダザン・ドゥスン系住民を代表する協会としては，KCA とは別に，次節で述べるドゥスン族を自称するグループが独立直後に創った統一サバ・ドゥスン協会 (USDA) があった。USDA と KCA との間では設立当初から，カダザン・ドゥスン系諸民族の民族名称をめぐる論争が展開された。この背景には，カダザン・ドゥスン系諸民族を統合するに当たりだれが主導権を握るかという指導者層の権力争いや，カダザンを自称するプナンパン地域住民とドゥスンを自称するその他地域の住民 (特にコタ・キナバル北部のトゥアラン地域や内陸部のタンブナン地域の住民) との地域住民間の争いがあった。

カダザン・ドゥスン系住民の民族名称をめぐる論争は断続的ではあるが，1990 年代に入るまで 30 年近くにわたって繰り返された²⁴⁾。その間，カダザンとドゥスンの併記 (Kadazan Dusun) やハイフンでつなぐこと

(Kadazan-Dusun) が提案されたり、あるいはまた、両者を合成したカドゥス (Kadusu) という新しい民族名が提唱されたこともある。

カダザン・ドゥスンの民族名称問題に新たな進展が見られたのは、1980年代末であった。1989年11月4日・5日に開催されたKCAの第5回代表会議において、協会名をそれまでのカダザンから、カダザンとドゥスンを併記したカダザン・ドゥスン (Kadazan Dusun) に変更することが満場一致で採択された。これは、カダザン族とドゥスン族が、同じサバの先住民 (*anak negeri Sabah*) として合同する意志を示したものである。と同時にカダザン・ドゥスン族中心の当時のサバ州政府与党PBSが、連邦政府与党の中核政党である統一マレー国民組織 (UMNO) と決別し、対抗することを確認するものであった。カダザン・ドゥスン両者の併記が決議された結果、カダザン文化協会 (KCA) もその名称をカダザン・ドゥスン文化協会 (Kadazan Dusun Cultural Association : KDCA) に変更することとなった。だが、これはあくまでもカダザン族を自称する側 (KCA) の対応であり、ドゥスン族を自称する側 (USDA) からの反応は鈍かった。また、この時点では、カダザン族とドゥスン族の両者を統合する目的があったにせよ、カダザンとドゥスンという2つの民族名をただ単に併記するに止まっていたことにも注意を要する。

カダザン・ドゥスンの民族名称問題に最終的な決着が見られたのは1991年であった。当時、中国語やタミール語 (インド系住民の主要言語)、イバン語 (サラワクのイバン族の言語) に次いでカダザン・ドゥスン語を第四の民族語として公教育 (初等学校) に導入することがマレーシア連邦議会で正式に検討されはじめた。これを受けて、サバ州政府および関係諸団体は当該言語の名称、すなわち言語学的にドゥスン諸語と呼ばれる言語を指示する言語名を早急に確定する必要に迫られた²⁵⁾。その結果、1995年1月24日に、KDCAとUSDAの間でカダザンドゥスン (Kadazandusun) という新たな名称を当該言語名として正式に採用する合意が取り交わされ、長年の懸案であった民族名称問題は一気に解決に向かった²⁶⁾。というのは、言語名を確定することを通して、間接的にはあるが、民族名もほぼ確定したとみなせるからである。ここに至り、それまでのようにカダザンとドゥスンという二つの民族名をただ単に併記するのではなく、それらを合成して単一の新たな民族名 Kadazandusun を創り出したという点が重要である。要するに、言語名の創出と

ともに新たな民族名 = 民族 (カテゴリー) を生成させたのである。これ以後, KDCA も, 協会名を Kadazan Dusun Cultural Association から Kadazandusun Cultural Association に変更し現在に至っている。また, KDCA はもとより, 種々のレベルの公文書や新聞等のマス・メディアにおいてもカダザンドゥスンという表記が徐々に認知されて来ている²⁷⁾。

KDCA は, 1950 年代にカダザン協会として設立以来, 多様なカダザンドゥスン文化の保護, 振興に貢献してきた。特に, 言語や口承文芸の他に, 伝統的な薬や治療法, 飲食物, 音楽や歌謡, 舞踊, 工芸, 絵画, 彫刻, スポーツ, 服飾の保護, 振興に努めている。現在特に取り組んでいるのは, 様々な伝統的知識に関する権利の保護である。この一環として, 村落や地域, さらに州レベルの「収穫祭」(*pesta kaamatan*) を主催し, また, サバやマレーシアのみならず, アジアやヨーロッパ, アメリカ, カナダ, ニュージーランド等でも伝統文化の紹介を行っている。

KDCA の綱領第 6 条第 1 項によると, カダザンドゥスン族には以下の 40 の民族, 言語集団が含まれる。すなわち, 1 . Bonggi (サバ北部のバンギ島に居住), 2 . Bundu (タンプナン周辺の内陸山地), 3 . Dumpas, 4 . Gana, 5 . Garo (コタ・マルドゥ付近のルングス), 6 . Ida'an (ラハッド・ダトゥ周辺), 7 . Kadayan (クアラ・プニウ付近のイスラーム教徒), 8 . Kimaragang (コタ・マルドゥ), 9 . Kolobuan, 10 . Kuijau (ケニンガウ周辺のピンコール。カダザンドゥスンとムルットの混血), 11 . Lingkabau (スグット河支流リンカバウ河流域のルングス), 12 . Liwan (タンプナン周辺の内陸山地。Bundu より内陸), 13 . Lobu (キナバタンガン河上流ラバウ川流域のドゥスン), 14 . Lotud (トウアラン周辺), 15 . Lundayo (ロン・パシ ア 周 辺), 16 . Makiang, 17 . Malapi, 18 . Mangkaak (キナバタンガン河上流域ドゥスン), 19 . Minokok (キナバタンガン河上流), 20 . Murut (プンシアンガン及びテノム周辺), 21 . Nabai (ケニンガウのムルット), 22 . Paitan (北部パイタン河流域), 23 . Pingas (キナバタンガン河上流域。ドゥスンとムルットの混血), 24 . Rumanau (キナバタンガン河上流ドゥスン), 25 . Rungus (クダット地区), 26 . Sinobu, 27 . Sinorupu, 28 . Sonsogon (ムロボン半島のルングス), 29 . Sukang, 30 . Sungei (キナバタン河流域。イスラーム教徒), 31 . Tatana (クリアス

半島。中国人との混血), 32. Tangaras (キナバタンガン河上流ドゥスン), 33. Tidong (ラハッド・ダトゥ周辺。イスラーム教徒), 34. Tindal (コタ・ブルッド), 35. Tobilung (クダット半島のルングス), 36. Tolinting, 37. Tombonuo (パイタン河流域のルングス), 38. Tuhawon (タンブナン), 39. Tutung (ブルネイ, トウトン周辺), 40. Bisaya (ピュフォ-ト周辺。イスラーム教に改宗) の, 合計 40 の民族, 言語集団である。

KDCA の綱領によると, 上記いずれか一つを母語とし, 日常的にその伝統や慣習を遵守し, 文化的帰属を表明する者はカダザンドゥスン族としての要件を満たす。そして, かくして定義されるカダザンドゥスン族は「疑いの余地のないサバの先住民」であるという。

以上に示した KDCA のカダザンドゥスン族の定義では, 言語学的に異なるとされるムルット族 (20 番目) やスンゲイ族 (30 番目), テイドン族 (33 番目), ビサヤ族 (40 番目) などがカダザンドゥスン族に含まれることに特に注意を払う必要がある。というのは, 言語学的に客観的な民族分類と, KDCA による主観的な民族分類の間には明らかに齟齬が見られるからである。そしてまた, 以下で述べる民族ないし民族別文化協会の再編成においては, 主要民族によるこれら周辺ないし境界線上の民族の意図的な包摂や排除が試みられているからである。

さて, KDCA の会員となるためには, 父母や祖父母等祖先のいずれかがカダザンドゥスンであればよい。これは, ルピング (Luping 1994) によると, 中国人移民とカダザンドゥスン族との混血が進んでおり, 混血の結果生まれたシノカダザン (Sino-Kadazan) たちを KDCA に入会させるために必要な譲歩であったという。同様に, 隣接諸民族との混血とされるクウィジャウ (10 番目) やピナガス (23 番目) をカダザンドゥスン族と認定していることは, 彼らをカダザンドゥスン族に取り込むことを意味している (ただし, KDCA の定義によると, 彼らはカダザンドゥスン族そのものということになる)。

KDCA の綱領にはさらに, 自身がカダザンドゥスンでなくとも, カダザンドゥスンと結婚し, KDCA の設立趣旨に賛同する 16 才以上の者は KDCA の賛助会員となることができるという付帯条項がある。この付帯条項により, KDCA にはシノカダザンをも含めた広範囲のカダザン・ドゥスン系諸民族を協会員に擁することができるのである。

KDCA は, カダザンドゥスン族の社会, 文化, 経済的な向上と振興

を目的とし、社会、文化、政治的にマレーシアの他の諸民族と同等の地位を獲得することを宣言している。

KDCA の目的は以下のように規定されている。すなわち、1) 相互理解、友好を深め、文化的活動を行う、2) カダザンドゥスン族、ひいてはサバ州の伝統文化の保護と振興、3) カダザンドゥスン族の間に文芸や工芸、音楽、舞踊等に対する関心を高める、4) カダザンドゥスン語の運用、発展を支援する、5) カダザンドゥスンの自立を促進する、6) 市民としての自覚を促す、7) 以上の目的を達成するために必要な諸活動を時機に応じて行う、ことである。

KDCA は上記の目的を達成するために、文化振興部や経済振興部、人的資源開発部、婦人開発部、保険・福祉振興部、組織開発部等を設置している。また、起業、経済に関しては、コイサアン信託資金、コイサアン持株会社及びその支配下の企業を擁している。さらに、経済開発特別委員会を設置するなど、通常の文化協会の枠を大きく逸脱している。このことからわかるように、KDCA は今や巨大な文化・社会・経済かつ政治団体として機能していると言えよう。

2) 統一サバ・ドゥスン協会

英語名の略称である USDA として知られる統一サバ・ドゥスン協会 (United Sabah Dusun Association) は、マレー語名を Persatuan Dusun Sabah Bersatu、ドゥスン語名を Pisompuruan Dusun Sabah という。以下、主に、USDA から 1998 年 3 月 12 日付けでサバ文化局に提出された資料に基づいてドゥスン協会の概要を述べてみたい²⁸⁾。

USDA の設立趣旨は、1) ドゥスンという民族名称を保持する、2) ドゥスン系諸民族間の友好を促進する、3) ドゥスン族の権利・福祉の促進をはかる、4) ドゥスン族の文化遺産を記録・維持し、ドゥスン族のために文化施設や獲得する、5) 標準ドゥスン語の制定に努力し、6) ドゥスン族の教育レヴェルの向上を図り、7) サバ及びマレーシアの多様な民族との協調を促進することにある、という。

USDA の設立は 1950 年代初頭にまでさかのぼる。第二次大戦後しばらくして、トゥアラン (コタ・キナバルの北東近郊) の Limbai Angkapon と M.Y.Rahman が、同地域の口トゥッド・ドゥスン及びバジャウ族の文化を保護・振興する目的で、ドゥスン協会の前身とでも言うべきトゥ

アラン慣習協会 (Persatuan Adat Tuaran : PERADATAN) を設立した。

一方、後にサバ州の初代首席大臣となるドナルド・ステフェンは、ブナンパン (コタ・キナルの南近郊) のカダザン族を結集してカダザン協会を 1953 年に設立し、さらに 1961 年に統一カダザン国民組織 (United National Kadazan Organization: UNKO) という政党を設立した。ステフェンらは 1961 年 8 月 6 日に開催された UNKO の最初の総会で、それまでドゥスン族と総称されていた諸民族の自称として「カダザン」を採用し、ドゥスンを廃止することを決議した。これは、「ドゥスン」という言葉が持つ「田舎者」などという否定的含意を払拭するためであったと言われている (上杉 1999 参照)。しかし、トゥアラン地域の代表 (ロトゥド族) はこれに反対して総会に参加しなかった。また、内陸部ラナウ地域の代表 (Ghani Gilong) らは、民族名としてカダザンを採用するという多数意見には従ったが、民族名の変更には疑義を呈した²⁹⁾。

カダザン族への民族名称の変更が議決された 1 ヶ月後、1961 年 9 月 8 日には、500 人以上のドゥスン族とムルット族の代表たちが内陸部のケニンガウに集合し、UNKO の会議で自分たちの意見が聞き入れられなかったことに不満を述べ、カダザン族への民族名称の変更反対を表明した。そして、ケニンガウのクウィジャウ・ドゥスン族 (ドゥスンないしカダザン族とムルット族の混血民族) 出身のスندان (G.S.Sundang) を中心にして、1962 年 1 月に新たな政党・パソック人民組織 (Pasok Momogun Organization) を結成した。これは、海岸部キリスト教徒カダザン族エリート主導の UNKO への、内陸部ドゥスンないしムルット族エリートの反対表明であったとみなすことができよう。

その後、1964 年には、統一カダザン国民組織とパソック人民組織は再び連合し、連合パソック - モモグン・カダザン組織 (United Pasok-Momogun Kadazan Organization : UPKO) を結成した。

一方、この連合に加わらなかったトゥアラン地域のドゥスン族エリートたちは、カダザン族にサバ州政治の主導権を握られることを懸念し、広義のドゥスン族を統合する組織の必要性を強く意識するようになった。そこで、1964 年 6 月のトゥアラン慣習協会の総会で、協会名にドゥスン族を冠したサバ・ドゥスン協会 (Sabah Dusun Association : SABDA) として協会を刷新することが提案された。協会名はその後一部修正され、結局、現在の統一サバ・ドゥスン協会 (USDA) として 1965 年 7 月 5 日

に登録された。

創設以来、USDA の活動は決して活発とは言えない。しかしながら、カダザン族に対抗するという意味もあり、設立以来一貫して、KDCA (カダザンドゥスン文化協会) との違いを強調している。例えば、カダザンドゥスン系諸民族の間で祝われる収穫祭にしても、KDCA がプナンパンの同協会文化センターで *kaamatan* と称して開催しているのに対し、USDA は本拠地であるトゥアランで、別の名称を使って別個に開催し続けている。

USDA は、基本的にはドゥスン族固有の文化の保護や振興をその目的としている。だが、設立当初よりドゥスン族の政党的役割も担っている³⁰⁾。1980年代後半、KDCA の会長かつサバ統一党 (PBS) の党首であるパイリン・キティンガンがサバ州の主席大臣であった時期には、USDA の会長であるマーク・コディン (Mark Koding) がサバ州の副主席大臣を務めた。だが、後に両者は袂を分かち、マーク・コディンらドゥスン族のリーダーたちは1987年にPBSを脱党して独自の政党・人民正義党 (Angkatan Keadilan Rakyat : AKAR) を結成するに至った。言うまでもなく、USDA は AKAR の強力な支持母体であった。

USDA と KDCA は創設以来、民族名称問題をめぐって争ってきた。しかし、1990年代初めにカダザン・ドゥスン語が公教育に導入されることが決まり、1995年1月にはUSDA と KDCA の間で当該言語をカダザンドゥスン語とする合意が成立した。それ以降、徐々にカダザンドゥスンという民族名称が定着しつつあることはすでに述べた通りである。しかしながら、USDA は、パイタン語およびドゥスン語系諸語を使用する諸民族をドゥスン族と称することをあくまでも主張し続けている³¹⁾。

3) サバ・バジャウ芸術文化協会³²⁾

サバ・バジャウ芸術文化協会は当初、統一サバ・バジャウ協会 (英語名 The United Sabah Bajau Association : マレー語名 Persatuan Sabah Bajau Bersatu) として1964年7月7日付けで登録を認可された。

サバ・バジャウ芸術文化協会の前身である、統一サバ・バジャウ協会が綱領で挙げている協会の目的は以下の通りであった (cf. *Persembahan Budaya Bajau di Kuala Lumpur*)。すなわち、1) マレーシア国とイスラ-

ム教への忠誠心を涵養し、サバ州に住むバジャウ族の連帯を促進する、2) バジャウ族社会と個々人の経済、教育、社会、文化を振興する、3) バジャウ族大衆の経済、教育、社会、文化の水準をあげるための援助、協力をする、4) 会員相互の連帯を増進し、出身や宗教に関係なくサバの諸民族と親交を深める心を涵養する、5) サバの先住民 (*penduduk asli negeri Sabah*) としてのバジャウ大衆の基本的権利を確立することを目指して努力する、そして6) 以上の目的を達成するために政府およびその他の諸団体と協力する、というものであった。

統一サバ・バジャウ協会の綱領で注目すべきは、バジャウ族のサバでの先住民性を確立することを協会の目的に挙げていたことである。しかしながら、本協会は1990年代に入るまで特に目覚ましい活動を行った形跡はない。

バジャウ協会の活動が活発になるのは、サバ州政権がカダザン・ドゥスン族を中心としたサバ統一党 (PBS) から、マレー・ムスリム系諸民族を中心とする与党連合政権 (国民戦線) に移行することが明らかになった時期に一致する。この時期、バジャウ族は自分たちの先住性を強く主張しはじめる。カダザン・ドゥスン族中心のサバ統一党 (PBS) 政権時代には、バジャウ族はしばしばフィリピン南部からサバへ移住した「移住民」と考えられていた (Evans 1952; Sullivan and Regis 1981)。だが、PBS 政権が瓦解し始め、マレー・ムスリム系住民が優先する連合政権への移行が日程に上り始めた1990年代初めには、後に詳しく述べるように、バジャウ族は自分たちがサバの先住民であることと、マレー系民族として連帯すべきであることを強調しはじめた。

統一サバ・バジャウ協会、すなわちバジャウ族が自らの先住民性を主張するということはとりもなおさずサバの歴史の再検討であった。統一サバ・バジャウ協会の活動が活発になり始めたほぼ同じ頃、1993年11月に、インドネシアのジャカルタで第1回目の国際バジャウ・サマ会議が開催された。この会議では、フィリピンとマレーシア、インドネシアにまたがる国境を越えたバジャウないしサマ族社会の存在の確認と慣習や宗教、歴史に関する広範な学術的報告がなされた。だが、この国際会議開催の効果はむしろサバのバジャウ・サマ族の社会・政治的地位を確立することにあつたように思われる。実際、2年後の1995年6月には、コタ・キナバルで、統一サバ・バジャウ協会を解消・発展させたサバ・

バジャウ芸術文化協会が同様の国際会議（「バジャウ・時を越えて」と題するバジャウ・サマの国際会議）を主催し、バジャウ族はバジャウ・サマ族の歴史の再検討を通して、さらに連帯を強めていった³³⁾。この種のバジャウ（サマ）族による歴史の再検討は、バジャウ協会だけでなく、後に述べる、イラヌン協会やピサヤ協会等の他のマレー・ムスリム系諸文化協会でも見られた。

1995年、統一サバ・バジャウ協会は名称を今日のサバ・バジャウ芸術文化協会に変更した。その際、協会の綱領も改正し、協会の目的を伝統文化の継承や振興に限定すると同時に、政治性を払拭した。また、会員資格を規定しなおした。新綱領によると、協会員はスルック族、イラヌン族、ピナダン島民、ウピアン島民を含めた広義のバジャウ族出身であり、同時に、マレーシア国籍（市民権）を持ち、サバ州に定住する者に限るといふ。ここで言うバジャウ族とは、両親の少なくとも一方がバジャウ族でイスラーム教を信奉し、バジャウ文化を保有する者であるといふ³⁴⁾。

1997年の年次報告によると、バジャウ協会は西海岸のコタ・ブルッドや東海岸のスンボルナ、サンダカン等に15の支部を持つ。1999年以降活動が停滞したのか、協会法で規定されている年次報告提出の義務を怠ったため、1999年4月15日付けで一度登録の抹消を通告されている。しかし、同年12月に登録抹消の取り消しを求める請願書が提出されており、登録抹消は取り消されたものと思われる³⁵⁾。その請願書によると、会長は元サバ州主席大臣のサレ・サイド（Salleh Said）で、会員数は5000人を数えるといふ。

4) 統一ムルット・サバ協会³⁶⁾

協会登録局のファイルによると、統一ムルット・サバ協会（Persatuan Sabah Murut Bersatu : PSMB）の設立趣旨は、1) ムルットの生活水準を向上させサバの他の民族と同等にする、2) 教育水準を高める、3) ムルットのビジネスへの参画を推進する、4) ムルットが自立する方法を探る、5) ムルットの文化と言語の維持、振興を計ることにある。

統一ムルット・サバ協会の歴史は、初代会長に就任した Ahjie Ginsuan や Kadoh Agundong（初代書記）、Simiu Sambangら、ムルット族の若手指導者たちが1975年10月28日に協会を登録した時点にまで遡

る。

統一ムルット・サバ協会の発足は、ムルット族の教育、経済、社会、文化レベルが他の民族より劣るという認識のもとになされた。1989年まで Ahjie Ginsuan が会長職に就いていたが、1989年の総会で役職者が刷新された。会長職にはアメリカの大学でマスコミュニケーションと政治学を学んだ Richard Joe Jimmy が就き、副会長等の役職には大卒の公務員ないしビジネスマンが就いた。そして、1990年にムルット族初の収穫祭 (*orou napangaan nanantab*) をテノムで開催した。この収穫祭では、当時のサバ州主席大臣の代理として副主席大臣のジョセフ・クルップ (Joseph Kurup) が開会を宣言し、内陸部のテノムやシピタン、ピュフォート、ブンシアンガン、ケニンガウ、クマボンのムルット族が多数参集した。収穫祭では各種のスポーツ、文化ショー、歌謡コンテスト、美人コンテストが開催された。

以来、統一ムルット・サバ協会は活発に諸活動を展開している。1996年5月には、統一ムルット・サバ協会は州レベルの「収穫祭」を KDCA とともに共催した。また、同年8月には、プナンパンのカダザンドゥスン文化センターで開催された第2回世界先住民年次大会 (Annual International Day for the World's Indigenous Peoples) を、KDCA や USDA とともに共催した。さらに、同年9月にはサバ開発研究所 (Institute for Development Studies, Sabah) 主催の「文化間の対話」セミナーにおいて、協会員が「ムルット文化のエッセンスと原点」(The Essence and Polar of Murut Cultures) と題する報告を行った。また、翌1997年11月には、スランゴールの Dong Jino Zong 高等教育センターで、「ムルット族が教育上で直面する諸課題と展望」(Problems and Prospects facing Murut Education) と題する報告も行っている。

統一ムルット・サバ協会はサバ全土に100カ所以上の支部を持ち、3000人の会員を擁する。

5) サバ統一ビサヤ協会³⁷⁾

マレー語で Persatuan Bisaya Bersatu Sabah (サバ統一ビサヤ協会)、略称で PBBS と名乗る。1997年～2000年まで、会長は5代目のラジム・ウキン (Lajim Ukin) である。

PBBS は、Mohd. Dun Banir が、1977年初頭に、ピュフォートの

Limbawang 村のピサヤ族代表を集めて開いた集會に起源を發する。その後、1977年7月5日に協會登録局サバ支局に登録した。

PBBSは設立以來20年を経てサバ全土に支部を設置し、ピサヤ族の福祉や教育、生活レベルの向上に寄与してきた。PBBS設立の目的は、1)ピサヤ族の生活の向上と改善を計り、サバ及びマレーシアの他の民族と同等に成ることを目指す、2)ピサヤ族の伝統と文化を研究し保護する、3)サバ及びマレーシアの他の民族との友好と協力関係を促進する、4)文化活動を行うために基金を募る、5)会員の利益に供する種々の活動に参画し、それを促進する、6)会員の社会・經濟的地位の向上と福利の發展を促すための諸活動を実施する。

1988年現在、PBBSは5000人の会員を擁し、サバ全土に200以上の支部を持つ。

6) サバ・イランン・ブミプトラ協會³⁸⁾

マレー語名はPersatuan Bumiputra Iranun Sabah (PISBA)で、会長はサバ州政府及びマレーシア連邦政府の閣僚を歴任したパンディカール・アミン (Pndikar Amin) である。

イランン協會の設立の目的は、イランン族の經濟・社会レベルを向上させ、あわせてイランン文化を保護・振興することにある。また、他の諸民族と友好、理解を深め、ともに發展を目指す。さらにイランンの自立を促進して国創りに参画し、教育を振興し国民意識を高めることにある。

独立後の1960年代半ば、イランン族の村々には小学校さえなかったと言う。このような悲惨な教育状況を改善するため、イランン族リーダーたちは政府に小学校の建設を要求した。この頃、イランン文化は急激に他民族の影響を受けており、このことも深刻な問題であった。

このような困難に直面し、1970年代に入ると、協會を設立して伝統文化の保護、振興をはかる必要性が認識された。それはとりもなおさず、イランン・アイデンティティーの確立と教育、經濟レベル、社会生活、福祉の向上に自らが取り組むことであった。かくして、1978年4月15日にPISBAの設立が決定され、同年10月9日付けで正式に登録が認可された。

7) サバ・ルンダイエ文化協会³⁹⁾

1979年にサバ・ルンダイエ協会(Persatuan Lundayeh Sabah)として登録された。しかしながら、ほとんど活動しなかったために、8年後に一度登録を抹消された。

その後、1988年に、ルンダイエ族住民の要請を受けた Mttew Martin Akat が会長として新たにサバ・ルンダイエ文化協会を設立した。正式な登録は1993年6月23日である。1998年現在、シピタンに6支部、テノムに1支部を置いている。

協会の目的は、1)ルンダイエ文化や慣習、伝統の保護と振興、2)ルンダイエ族の社会・経済レベルの向上、3)ルンダイエ族の市民意識の高揚、などが挙げられている。

8) サバ・ティドン協会⁴⁰⁾

サバ・ティドン協会(Persatuan Tidong Sabah)は1985年に発足したが、登録されたのは1990年3月28日であった。

設立の目的は、1)ティドン族を社会、経済、文化、教育、福祉の面から向上させること、2)ティドン族の文芸や文化等の伝統を保護する、3)福祉、教育基金を設置し困窮者を支援する、4)他の協会と協力する、である。

サバ・ティドン協会が実際に活動を開始したのは1991年3月であった。サンダカンのBeluranの公会堂で開催された発足式典には、約3000人のティドンが参集した。サバ州議会議員のHasbullah Mohd. Tahaを参与とし、Mohd. Kamsa Asahが初代の会長である。1996年現在、タワウに4支部、サンダカンに6支部を設置し、会員数は約2000人である。ちなみに、ティドンの人口は8500人を下まわらないと推定されている。

以上、主要な民族別文化協会の生成と変遷過程を簡単に見てきた。いずれの文化協会も当然のことながら、民族固有の伝統文化の保護と振興をその目的に挙げている。だが、それとともに、文化協会にもかかわらず、いずれの協会も自分たちの社会的地位や経済レベルの向上を協会の目的に挙げていることが注目される。実際、サバの文化協会はいずれ

も福祉や生活の改善，生活レベルの向上に関連したさまざまな活動を展開している。この種の活動は日本では通常政治的目的に基づいて設立された政党や福祉団体などが担っている。従ってまた，サバの文化協会はきわめて政治的色彩の強い活動を展開することになる。その結果，文化協会の代表にはいずれも有力政治家が選ばれている。あるいはまた，後に述べるように，このことが政治家をして文化協会の代表を務めさせる大きな動機となっているのである。

要するに，サバの民族別文化協会は，独立や政権の交代期・変動期に設立され，政治が流動的になると活動が活発になっているのである。

5．民族と文化協会の再編

国勢調査の結果を基にしたサバの人口動態で確認した通り，近年，サバではフィリピンおよびインドネシアからのムスリム（イスラーム教徒）移民の流入が顕著である。このことから，一つにはムスリム移民をめぐって，サバのマレー・ムスリム系諸民族の再編が予想される。すなわち，バジャウ族やイラヌン，ピサヤ族等を巻き込んだ民族の再編である。そしてこの種の再編とほぼ時を同じくして，マレー・ムスリム系諸民族の文化協会が設立ないし再編されていったと予測される。

他方，この種のマレー・ムスリム系諸民族の再編に対抗して，非マレー・ムスリム系先住諸民族の再編も予想される。キリスト教徒が多数を占めるカダザン・ドゥスン族やムルット族を中心とした諸民族の再編である。この種の再編でも，マレー・ムスリム系諸民族におけるのと同様に，文化協会の生成ないし再編が予想される。

1) ムスリム移民の同化

バジャウ族やイラヌン族等のマレー・ムスリム系諸民族の文化協会をその設立ないし登録時期から検討してみると，まず以下の点が指摘できる。すなわち，設立・登録時期がサバの独立時期である1960年代半ばと，1970年代半ば，及び1990年代の三つに分けられるということである。

独立直後の1964年にバジャウ協会が登録された点については，何ら不思議はない。当時の主要民族であるカダザン・ドゥスン族がカダザン文化協会やドゥスン協会を設立・登録したのに対抗し，バジャウ族も独

自の文化協会を設立・登録するのは当然のことであった。

バジャウ族に比べ人口や政治的発言力で劣るイラヌン族やピサヤ族の協会が登録されたのは比較的最近で、それぞれ1978年、1977年であった。彼らはそれ以前、独自の文化協会を持っていなかった。このことと、イラヌン族やピサヤ族が独立のはるか以前からサバに居住していたことを考え合わせると、イラヌン族やピサヤ族は当初独自の協会を組織せず、マレー・ムスリム系諸民族としてバジャウ協会に属していたことが推定される。言葉を換えると、イラヌン族やピサヤ族はかつて、バジャウ族ないしバジャウ族の中の一族と見なされていたのではないかということである。そして、1970年代半ばサバ州政権が多民族政党へと劇的に移行した時、イラヌン族やピサヤ族等の少数民族集団が自分たちの存在を主張すべく独自の文化協会を設立したのである。

1990年初めから半ば以降になると、文化協会を新たに設立・登録するグループの性質に変化が見られる。移住ないし帰化した住民たちが、自分たちの民族名ないし出身地名を冠した文化協会を設立し始めるのである。1990年以前は、ブギス協会（1985年登録）が唯一のその種の協会であった。しかし、1997年にはバジャウ・ウピアン協会が、1996年にはジャワ福祉文化協会が、1994年にはスボルナ・シムヌル・シプトゥ協会が、1997年にはトラジャ協会が設立・登録されている。

協会法によると、各種協会の会長等の役職者はマレーシア市民権（国籍）を持たねばならないことが規定されている。このことと、1990年代半ば以降、移住民が彼らの民族名ないし出身地名を冠した文化協会を多数登録してきたという事実は、移住外国人たちが帰化してマレーシアの市民権（国籍）を得たか、外国人移住者の子供たち（第二世代以降）がマレーシア人として成長し、主導権を握るようになったことを意味する。

2) マレー・ムスリム系諸民族の再編

1990年代初頭、サバ州政権はマレー・ムスリム系民族中心の与党連合・国民戦線の手に移った。その前後、マレー・ムスリム系諸民族は自分たちの起源神話を再解釈することを通して一つには相互連帯の強化を図り、同時に、「サバでの先住性」ないし「サバへの帰還」を強化したり正当化するような言説を主張するようになった。

まず、マレー・ムスリム系民族の中の最大民族であるバジャウ族につ

いて検討してみよう。サバにおけるバジャウ族の位置付けは微妙である。1880年代の北ボルネオ勅許会社の統治以来、バジャウ族は、カダザン・ドゥスン族同様、ボルネオないしサバの「原住民」ないし「先住民」の地位を与えられてきた。しかし同時に、バジャウ族はフィリピン南部に起源を発する「漂海民」と考えられ、特に、サバ東海岸の島嶼に住む「海バジャウ」(Sea Bajau)はサバへの移住者とみなされていた(Evans 1952, Sullivan and Regis 1981)。この結果、バジャウ族は「純粋な」サバの住民ではなく、フィリピン南部のスルー諸島に起源を持つ「よそ者」で、サバの「移住民」と考えられがちである。

これに対し、バジャウ族の口頭伝承では、彼らの起源地はフィリピンではなくサバないしカリマンタン(インドネシア領ボルネオ)であるという(Mohd.Yassin 1982, cf. Evans 1952)。伝承によると、バジャウ族は初めインドネシアに住みバジュエ(Bajueh)ないしバジョ(Bajo)、バジョエ(Bajoe)と呼ばれていたという。彼らは生活の糧を求めてフィリピンに渡り、そこで現地女性と結婚した。こうしてフィリピンに移り住んだバジョエは、後に、バジャウ(Badjau)として知られるようになった。彼らは次々に周辺民族を征服し、もっとも強いものが王(rajā)となった。バジャウ族の歴代の王たちはフィリピンからサバやカリマンタン(インドネシア領ボルネオ)にまで遠征し、バジャウ族の王の子孫がサバのバジャウ族になったという。

以上のような起源伝承を持ちながら、キリスト教徒が多数を占めるカダザン・ドゥスン族中心のサバ統一党(PBS)政権下(1980年代)では、バジャウ族は彼らが「漂海民」であり、したがってまたサバの「移住民」であるという性格付けに敢えて反対するようなことはなかった。

だが、PBS政権の瓦解が日程に上り始めた1990年代に入り、バジャウ協会の有力メンバーであるMohd. Said(1990a)らは、バジャウ族の自称はサマ(Sama)で、フィリピン南部からサバ、カリマンタン、マルク諸島やバング諸島にまで広範囲に居住することを主張し始めた。モハメッド・サイドは「バジャウ」という民族名称は他称であり、自称はサマ(Sama)であるとまず明言する。そして、以下のように続ける。バジャウ族はしばしば北部のコタ・ブルッドを中心にして居住する陸バジャウ(Bajau Darat)あるいはトゥンパスック・サマ(Sama Tempasuk)と、東海岸のセンボルナを中心にして居住する海バジャウ族

(Bajau Laut)あるいはクヴァン・サマ(Sama Kuvang)に二分される。しかしながら、実際にはそのような区分はこれまで存在したことはない。居住地や出身地で自らを名乗るにすぎない。それがいつの間にか、サブ・グループ名になったのである。しかし、自称はあくまでもサマである。サマの居住はフィリピン南部からカリマンタン東海岸及び南海岸、スラウェシ諸島、マルク諸島、バンダ諸島にまで広がっている。そのためサマ族には居住地域に応じた方言が見られ、クヴァン(Kuvang)、シムヌル(Simunul)、シヴトウ(Sivutu)、ウヴィアン(Uvian)、ラミヌサ(Laminusa)、シクヴン(Sikuvung)、ヤカン(Yakan)、ジャマ・マプン(Jama Mapun)あるいはカガヤン(Kagayan)、バラングィンギ(Balangingi)、シヴァウド(Sivaud)、バンナラン(Bannnaran)、ムンカブン(Mengkabung)、サマ・ディラウト(Sama Dilaut)あるいはパラウ(Pala'u)、テンパスック(Tempasuk)等のサブ・グループに区分される。にもかかわらず、サバではこれまでもっぱらバジャウという民族名称が使われてきた。最近、バジャウ協会から出版された本では「サマ」という名称が使われているが、民族グループに言及する場合にはやはりバジャウを使用するとしている(cf. Obon 1999:vi)。

モハメド・サイドはさらに、バジャウは人種的に言ってドイトロ・マレー人(新マレー人)に属するのでマレー人にほかならず、最近の考古学的知見からするとバジャウ族は石器時代からボルネオに居住していたことが明らかであるという(Mohd. Said 1990b)。要するに、人類学や考古学から見て、バジャウ族がマレー人に属し、ボルネオないしサバの先住民であることをモハメド・サイドは主張しているのである。バジャウ協会が1991年の綱領の改訂において、バジャウ族が先住民であることを殊更に強調したのは、この種の議論を反映したものである。

1990年代初めに展開された、フィリピン南部からサバ、インドネシア東部にかけて居住するバジャウないしサマは同一の民族で、ともにサバないしボルネオに起源を發するというバジャウ族(バジャウ協会)の主張は、フィリピン南部やインドネシア東部に住むバジャウ系住民(サマ)たちがサバへ「移住」する根拠ないし正当性を提供するものであった。というのは、サバないしボルネオがバジャウ(サマ)族の起源地であるとするならば、彼らがサバへ移動するのは「移住」ではなく、正当な権利に基づく「帰還」と考えられるからである。実際、1980年代後

半から 1990 年代初めのこの時期にかけて、すでに確認したように、フィリピンからの移民が激増した。例えば、フィリピン南部のスルック・バジャウ族やシムヌル・シプトゥ諸島民、あるいはウビアン・バジャウ族は、サバで文化協会を設立・登録するほどに増加している。

バジャウ族の起源神話の再解釈とほぼ時を同じくして、マレー系民族であるイラヌン族も起源神話を再解釈し始めた。イラヌン族は 1978 年には文化協会を登録している。だが、すでに述べたように、同協会は 1990 年代にはいるまでほとんど活動をしていない。イラヌン族はバジャウ族の中の一民族と見なされており (cf. Appell 1970), 従ってまたバジャウ族同様、フィリピン南部からサバへ移住してきたとみなされていた。実際、かつてイラヌン族自身もフィリピン南部のミンダナオ島が彼らの起源地で、サバが植民地となる前に、そこから移住してきたことを認めていた (Bandira Al Sabah 1984; Bandira Alang n.d.)

しかし 1990 年代に入ると、イラヌン族は彼らの起源地はフィリピン南部ではなく、ボルネオであると主張するようになってきた。伝承によると、13 世紀半ばに、10 人のマレー人リーダー (ダトゥ) 一行がボルネオから北に航海して現在のフィリピンに達した。そこで次々と住民を征服し、後にイラヌン族の本拠地となるミンダナオ島も平定した。そして、後の時代になって、イラヌン族はそこからボルネオ島 (サバ) にやってきた。したがって、イラヌン族はフィリピン人ではなく、ボルネオに起源を發するマレー人移民の子孫である、と言うのである (*Sejarah Ringkas Masyarakat Iramun* 1995)。この説に従うならば、イラヌン族はフィリピンからサバへ移住している (した) のではなく、ボルネオの起源地へ「帰還」している (した) に過ぎないということになる。そしてまた、バジャウ族同様、イラヌン族ももともとはマレー人ということにもなる。

バジャウ族やイラヌン族の文化協会を中心に展開された以上の言説は、ともに 1990 年代初めから半ばにかけて顕著となった。それはとりもなおさず、「文化」の再解釈を通じたマレー・ムスリム系諸民族の再編であった。

3) カダザン・ドゥスン系諸民族の再編

カダザン・ドゥスン系諸民族ないしその文化協会の動向に関してもっとも注目すべきことは、すでに述べたように、1991 年に、カダザン・

ドゥスン文化協会（KDCA：1991年時点では、KDCAはカダザンとドゥスンの両者を併記していた）と統一サバ・ドゥスン協会（USDA）が自分たちの言語をカダザンドゥスン語と呼ぶことに合意したことである。USDAはその後もドゥスンという民族名称を捨てた訳ではないと主張し続けている⁴¹。だが、サバ州政府を初めとする公的機関や新聞等のマスコミの対応を見る限りにおいては、これ以後、カダザンドゥスンという民族名称は徐々にではあるが、直実に定着しつつあるように思われる。そして、USDAの影響力はますます弱くなりつつある。実際、USDAは1996年に、KDCAや統一ムルト・サバ協会とともに、小規模とは言え世界各国の先住民を招いた国際会議（The 2nd International Day for the World's Indigenous Peoples）を共催しており、KDCAとの連携を深めざるをえないことは明白になりつつある。その意味で、カダザン・ドゥスン系諸民族は1990年代以降、カダザンドゥスン族として統合に向かっているとみなすことができよう⁴²。

ところが、マレー・ムスリム系民族を中心としたサバ州政権の樹立とともに、それまでカダザン・ドゥスン族として分類されていたムスリム（イスラーム教徒）住民の中には自らの帰属に意義を唱える民族が出てきた。それが、サバ南西部海岸のピュフォートを中心に居住するピサヤ族である。

ピサヤ族はカダザン・ドゥスン族と同じドゥスン語系の言語を使用する。このため、ピサヤ族はカダザン・ドゥスン族の中の一民族と長らく見なされてきた。ただし、ピサヤ族はイスラーム教徒であるため、イスラーム教に改宗したカダザン・ドゥスン系民族と考えられていた。実際、カダザン・ドゥスン文化協会の綱領においても、ピサヤ族はカダザン・ドゥスン族を構成する40の民族の一つに挙げられている。ピサヤ族も、カダザン・ドゥスン系諸民族が主導権を握る1980年代には、自分たちがカダザン・ドゥスン族であることを殊更に否定することはなかった。

ところが、1990年代初頭から、連邦政府の与党国民戦線の中核政党である統一マレー戦線（UMNO）がサバに進出するに至って、ピサヤ族は自分たちの帰属を微妙に変えていった。

ピサヤ族はブルネイの王侯貴族に関連を持つと信じ、ブルネイ・マレー人に強い親近感を抱いている。と言うのも、ピサヤ族の口頭伝承によると、ピサヤ族はボルネオ島の西の地方に起源を發し、そこから今の

ブルネイやフィリピンのビサヤ島に移住していったからである。ブルネイに移住した者は後にイスラーム教に改宗し、ブルネイ・マレー人の祖先になった。イスラーム教に改宗したビサヤ族のある者が、ジョホールのスルタンによって、ブルネイのスルタンに任命された。従って、ブルネイのスルタンとブルネイ・マレー人はともにビサヤ族の子孫で同じ慣習を持つのだという (*Pengenalan Suku Kaum Bisaya* 1994)。

ビサヤ族がブルネイ・マレー人やその他のマレー・ムスリム系諸民族との関係を強調するようになったのは、サバ州の政権がマレー・ムスリム系諸民族を中心とする国民戦線 (BN) に交代することが明白になってからである。以後、ビサヤ族はカダザン・ドゥスン系諸民族とは一線を画していく。

ビサヤ族が設立したサバ統一ビサヤ協会 (以後、「ビサヤ協会」と略記する) は、1977年に創設・登録されたが長らく休眠状態にあった。だが、サバの政治が流動的になった1990年代に入り活動が活発となった。そして、サバ州政権がカダザン・ドゥスン族中心のサバ統一党 (PBS) から国民戦線に移行した1994年、ビサヤ協会の会長ラジム (Lajim Okim) は州政府の閣僚に任命された。それを祝して、サバ全土の多数のビサヤ協会員が協会の歴史始まって以来初めてピュフォートに参集し、ラジムにビサヤ族の大首長の称号 (*Janang Gayuh*) を授与したという (Abdul Kahim 1994)。その称号を授与したのは、バジャウ族出身のサバ州州長 (元サバ州主席大臣) サカラン・ダンダイ (Sakaran Dandai) であった。

この出来事は、以下の二つのことを意味している。一つには、創設以来20年以上にわたって休眠状態にあったビサヤ協会が、マレー・ムスリム系諸民族を中心としたサバの新政権の下で活動を再開したことである。そして、より重要なことは、ビサヤ族がカダザン・ドゥスン系諸民族ではなく、バジャウ族等のマレー・ムスリム系諸民族との協力関係を強化することを内外に明確に示したということである。

以上のようなビサヤ族のカダザン・ドゥスン族からの「離反行為」に対し、カダザン・ドゥスン文化協会 (KDCA) は翌1995年の第7回年次総会において、ビサヤ族がカダザンドゥスン族の構成民族であることを改めて確認した。その際、KDCA会長のパイリン・キティンガンは、ビサヤ族とカダザン・ドゥスン族の言葉は単語の40パーセントが同じだから、ビサヤ族がカダザンドゥスン族であることに疑いはないと述べ

た (Sario 1995)。

1990年代に入ってピサヤ族(ピサヤ協会)がカダザン・ドゥスン族(KDCA)から徐々に距離を取り始めたのとは逆に、ムルット族(統一ムルット・サバ協会。以後「ムルット協会」と略記する)はカダザン・ドゥスン族との連携を強めていった。言語学的には異なる民族にもかかわらず、KDCAの綱領においては、ムルット族も、ピサヤ族同様、カダザン・ドゥスン族の中の一構成民族とされている。だが、ピサヤ族同様、ムルット族も1975年にはKDCAとは別個に独自の文化協会を設立し、民族の独自性を主張している。とは言え、統一ムルット・サバ協会は1990年代に入るまでほとんど活動らしい活動をしていなかった。この間、ムルット協会はKDCAによって長らく代表されていたと言えよう。

ところが、1990年代に入りムルット協会は会長ほか幹事を刷新し活発に活動を行い始めた。1990年には、カダザン・ドゥスン族を真似て、ムルット協会は初めて大規模な「収穫祭」を主催した。活動を再開したムルット協会は、ピサヤ協会がKDCAから離反しマレー・ムスリム系諸民族と親近感を深めていったのとは対照的に、KDCAにさらに接近していった。例えば、1996年以降、ムルット協会は州レベルの「収穫祭」をKDCAと共催するようになった。また、ムルット協会は同1996年に、KDCAやUSDAとともに、先住民に関する国際会議も共催している⁴³⁾。ムルット族(ムルット協会)は、カダザン・ドゥスン族(KDCA)との差異を明確に主張しつつも、カダザン・ドゥスン族(KDCA)と協力する道を選択したと言えよう。

以上、要するに、マレー・ムスリム系諸民族の再編成に対応し、カダザン・ドゥスン族やムルット族等のカダザン・ドゥスン系諸民族も文化協会の諸活動を通して民族の再編成を行っていたとみなすことができる。

4) 脱政治化する文化協会

すでに見てきたように、サバの民族別文化協会はきわめて政治的な組織であった。しかし、1990年代半ば以降、ほとんどの文化協会はその目的を本来の文化の保護や振興に絞り、協会から政治性を払拭しつつある。

統一サバ・バジャウ協会は1990年代初頭に協会綱領を改訂し、バジャウ族の先住民としての地位を確立することを盛り込んだ。が、1995

年に協会名を「バジャウ芸術文化協会」に変更すると同時に、綱領から先住民としての地位を確立するなどという政治的目的をいっさい削除した。また、バジャウ芸術文化協会（以後、「バジャウ協会」と略記する）への名称変更と同時に、会員資格を緩やかにした。かつては両親ともバジャウ族出身である「純粋」なバジャウ族しか会員になれなかった。しかし、綱領の改正後は、両親の一方がバジャウ族出身であれば会員となることができるようになった。この種の努力にもかかわらず、バジャウ協会の活動は1990年代後半には著しく停滞している⁴⁴。

バジャウ協会のようなマレー・ムスリム系諸民族の文化協会に見られる政治性の払拭は、以下のような理由によるものと思われる。

1990年代半ば、サバ州政権はマレー人主導の国民戦線（BN）に交代した。それ以降、数の上では完全な少数者であるにもかかわらず、イラヌン族の代表でありイラヌン協会の会長であるバンディカールや、ピサヤ族の代表でピサヤ協会の会長であるオキム・ラジムはサバ州政府ないしマレーシア連邦政府の閣僚として迎えられた。このことは、サバのマレー・ムスリム系諸民族が強力な政治的パイプを確保したことを意味する。つまり、彼らは民族別文化協会を通して自分たちの利益を擁護する必要がなくなったのである。その結果、民族別文化協会はその政治性を払拭したと同時に、活動を低下させていったのである。

ところで、1990年代半ばに設立・登録ラッシュが見られた移民・帰化民たちの文化協会はこれとは別の意味で、やはり脱政治化していった。

すでに述べたように、フィリピンないしインドネシア移民たちは、マレーシア市民権ないしは居住権を獲得直後にそれぞれの文化協会を設立したと思われる。この種の文化協会は固有の文化の保護や振興を唱えつつ、同時に彼らの福祉や社会的地位の向上等、きわめて政治的な機能をも果たしていた。だが、バジャウ協会のみならず、1990年代半ばに登録されたスルック・バジャウ協会、シヌムル・シプトウ島民文化協会、あるいはそれ以前に登録されたブギス協会やジャワ協会等は、1990年代後半以降、文化協会から政治的機能を払拭するとともに、ほぼいっせいに活動が低下している。

これは、彼ら移民や帰化民たちが、サバへの定着が進むに従って、民族ないし出身地別の文化協会を作るよりも、マレーシア人として生きる道を選んだためだと思われる。彼らは、例えば、フィリピン人移民・帰

化民ではなく、フィリピーノ・マレーシアン（フィリピン系マレーシア人）であるという主張をし始めた。中国系、インド系移民がそれぞれ中国系マレーシア人、インド系マレーシア人として認められるのであれば、フィリピン系マレーシア人が存在してもよいではないか、ということである。つまり、自分たちはもはやフィリピン人ではなく、マレーシア人だという主張である。この種の戦略を選択した結果、フィリピンとかインドネシアなどの出身民族を強調しがちな民族別文化協会は敬遠され、活動は低下していった。そして、また、フィリピン及びインドネシア移民・帰化民がマレーシア人であることを主張し始めた以上、移民の問題はもはや個々の民族の問題ではなく、サバあるいはマレーシア全体の問題へと大きく変わっていった。このような流動的政治・社会状況下では、民族別文化協会が出る幕はもはやほとんどないのである。

結論

人の移動にともなう民族の生成ないし再編は、いずれの国・地域でも政治的にきわめて微妙な問題である。ことに、大量の人の移動が頻繁かつ継続的に見られるような国境地域では特にそうである。フィリピンとインドネシアに国境を接し、ブルネイに近接したサバはまさしくそのような地域である。

人の大量移動、そしてそれに伴う民族の生成や再編はしばしば破滅的な武力衝突を引き起こしている。ソヴィエト連邦解体後の東欧の惨事を引き合いに出すまでもなく、フィリピン南部やインドネシアのカリマンタン、スマトラ等でも武力衝突や暴動、内戦が収まらない。幸いなことに、サバでは、住民の3分の1近くが近隣からの移民であるにもかかわらず、大規模な暴動や武力紛争は近年ほとんど生じていない。言い換えるならば、サバでは、フィリピンやインドネシアからの移民ないし「越境者」たちが、受け入れ社会と何らかの折り合いをつけつつ共存しているということができよう。本論文は、移民ないし「越境者」とホスト社会が織り成すこの種の相互作用（民族の再編）を、民族別文化協会の生成と再編を通して記述・分析することを目的とした。

その結果、以下の諸点が明らかとなった。

すなわち、まず第一に、民族の生成・再編と民族別文化協会の生成・

再編はほぼ同時に生じていることが明らかとなった。この点は、カダザン・ドゥスン族の生成（カダザン族とドゥスン族の再編）とカダザン・ドゥスン文化協会の生成（カダザン・ドゥスン文化協会およびドゥスン協会の再編）において特に顕著に見られた。あるいは、バジャウ族（バジャウ協会）とイラヌン族（イラヌン協会）、ピサヤ族（ピサヤ協会）、カダザン・ドゥスン族（カダザン・ドゥスン協会）、ムルット族（ムルット協会）等を巻き込んだ、マレー・ムスリム系諸民族やカダザン・ドゥスン系諸民族の再編においても、民族と文化協会の再編が連動していたことは明らかであった。

次に、第二点として、民族別文化協会の設立・登録時期に3つの波があり、それは1960年代半ばのサバの独立時期、1970年代半ば及び1990年代半ばサバ州政権の交代時期に対応していた。1970年代半ばの政権交代はマレー・ムスリムを中心としたUSNO政権からサバ初の多民族政党BERJAYAへの交代であり、1990年代半ばのそれはクリスチャン・カダザン・ドゥスンを中心とした多民族政党PBS政権からマレー・ムスリムを中心とした多民族政党BNへの交代であった。

第三点として、上記の民族別文化協会の設立・登録時期の3つの波を担った民族には特徴があるということである。すなわち、1960年代半ばはサバの主要先住民族（カダザン族ないしドゥスン族とバジャウ族）がまず協会を設立し、1970年代半ばには言わば「二番手」であるムルット族やイラヌン族が協会を設立した。そして1990年代半ばには、さら少数の先住民族（ティドン族やルングス族等）と、フィリピンないしインドネシアの移住民族（バジャウ/ウピアン族、バジャウ・スルック族、シムナル・シプトゥ島民等）が文化協会を設立していた。

第四点として、1990年代半ばの移民なし帰化民系文化協会の設立・登録ラッシュとはほぼ時を同じくして、サバのホスト社会をも巻き込んだマレー・ムスリム系諸民族の再編が始まったことを明らかにした。このマレー・ムスリム系諸民族の再編は、フィリピンないしインドネシアにまたがって広範囲に居住するバジャウ系諸民族（自称では「サマ族」）の再編であったという意味で、ただ単にサバ先住民の再編に止まらず、移民や帰化民を含めた大規模な民族の再編であったという点が特に注目されねばならない。

第五点として、上記のマレー・ムスリム系諸民族の再編に対応し、そ

れに対抗するカダザン・ドゥスン系諸民族の再編が、文化協会の連携等の動きに見られたことを挙げておきたい。

最後に、第六点として、1990年代末にかけて、政治的パイプを獲得したり、民族の独自性を強調しない戦略を選択した民族は、文化協会から政治的目的を捨象し、その結果、しばしば文化協会は休眠状態に入っていることを指摘した。バジャウ協会やイラヌン協会等は前者の例で、バジャウ/ウピアン協会やバジャウ・スルック協会、ジャワ協会等は後者の例である。ただし、どちらの戦略も取りえなかったカダザン・ドゥスン族やムルット族では、文化協会が今でも社会・政治的役割を果たし、活発に機能している。

以上、要するに、マレーシア(サバ)のように政治的活動がある程度制限されている国においては、民族別文化協会が政治的機能を持って政党の代替物となっており、文化協会の生成や再編を見ることによって、民族の生成や再編の過程をはじめて効果的に記述・分析することができるのである。

謝辞

本論文で示した資料は、文部省(後に日本学術振興会に移管)の科学研究費補助金(研究代表・宮崎恒二東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授「東南アジア島嶼部における民族移動に関する文化人類学的研究」[基盤研究(A)・課題番号10041010])を使用し、1998～2000年度の3年間にわたって実施した調査の際に得たものである。マレーシア(サバ州)で調査を実施するに当たっては、サバ州開発研究所(Institute for Development Studies, Sabah)のMohd. Yaakob Hj. Johari 所長とBilson Kurus 上級研究員にたいへんお世話になった。文献資料の閲覧に際してはサバ州開発研究所図書室、サバ州立公文書館、サバ博物館図書室、トゥン・フアッド記念図書館等に便宜を図っていただいた。また、文化協会等に関する資料の収集に当たっては、サバ博物館 Joseph Pounis Guntavid 館長並びに同博物館の Anthony Chong, Judeth John-Baptist の各氏、サバ州文化局の Jacqueline Pugh-Kitingan 博士、連邦協会登録局サバ支局長の Abdul Hamed bin Akob 氏、バジャウ協会の Mohamed Said bin Hinayat, カダザンドゥスン語基金(Kadazandusun Language Foundation)の Rita Lasimbang, 先住民経済発展研究所(Institute for

Indigenous Economic Progress Sabah) 所 長 の Wilfred Madius Tangau ,
Koisaan 文化開発研究所 (Koisaan Cultural Development Institute) 副所長
の Benedict Topin の各氏にお世話になった。記して深謝する次第であ
る。なお、ここに記した関係者各位の所属機関や職 (肩書き) はすべて
1999 年 6 月ないし 2000 年 8 月の調査時点のものである。

注

- 1) マレーシアでは、民族や宗教問題をテーマとして調査許可を得ること自
体がそもそもかなり難しい。
- 2) 本論文で提示する資料は、文部省 (日本学術振興会) の科学研究費補助
金を得たプロジェクト「東南アジア島嶼部における国際移動に関する文化
人類学的研究」(基盤研究 A・課題番号 10041010)(代表・宮崎恒二東京
外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授)の研究分担者として、
1998 ~ 2000 年にかけて実施した調査の際に収集したものである。したが
って、本論文で記述し分析する資料は、特に断らない限りは、2000 年ま
でのものとする。
- 3) Summer Institute of Linguistics (SIL) は現在、Summer Institute of
Linguistics International (SIL International) に名称を変更している。
- 4) サバにおいては民族の移動、生成と再編成が繰り返し行われているので、
特定の民族を先住民と断定することは困難である。そこで、ここでは、現
時点ですばを居住の中心とする民族をサバの「先住民」としておく。
- 5) このためもあって、後に述べるように、サバ州でドゥスン諸語を「カダ
ザンドゥスン語」として公教育に導入する際には、サバ西部沿岸地域から
内陸部で使用されているカダザン・ドゥスン語が標準語の基礎とされた。
- 6) サラワク側に居住するルンダイエ族は、サラワクではルン・パワン族
(Lun Bawang) と呼ばれている。なお、かつてルンダイエ族 (ルン・ダ
イエ族 Lun Dayeh と表記されていた) はムルット族 (Murut) と混同され
ていたが、現在では、言語・文化的にまったく別の民族とされている。
- 7) サバ州の民族や国籍別の人口動態に関する詳細な分析は拙稿 (Uesugi
2000) 参照。
- 8) 1991 年に実施された国勢調査に基づく人口統計は 1995 年に公表された。
- 9) フィリピンないしインドネシアからのイスラーム教徒移民が、非合法に
マレーシア国籍 (市民権) を取得しているという告発が最近なされている
(Mutalib 1999, cf. Luping 1994)。
- 10) ただし、営利企業や学校、PTA 等の団体、組織等は当該法令の下に登録
されるので、協会登録局に登録する必要はない(「協会法」第 2 条)。
- 11) クダーとブルリス州、クランタンとトレンガヌ州は二つの州で一つの支
局を、サラワク州にはクチンの他にミリにもクチン支局の支部が置かれて
いる。

- 12) 登録局では、申請協会・団体等を 01. 宗教, 02. 福祉, 03. 社交及びレクリエーション, 04. 婦人, 05. 文化・芸術, 06. 慈善, 07. 同業者組合, 08. スポーツ, 09. 青少年, 10. 教育, 11. 政治, 12. 労働, 13. 一般, に分類している。登録申請には、記入済み申請書(正本1通, 複写6通), 役職者名簿(正本1通, 複写6通), 協会規約(正本1通, 複写6通), 協会発足時の議事録(正本1通, 複写6通), 協会のロゴマーク・協会旗・協会バッジ(原色図案)(正本1通, 複写6通), 住所を明記した誓約書(正本1通, 複写2通)に郵便切手(30リンギット分)を添えて申請する。
- 13) 実際, 1999年の調査では文化協会に関するファイルの閲覧のみが許可され, 政党に関するファイルの閲覧はいっさい許可されなかった。
- 14) 協会登録局サバ支局に保管されているファイルの閲覧は, 1999年6月に, 当時の支局長 Abdul Hamed bin Akob 氏の許可を得て行った。しかしながら, 2000年8月の調査では, 新たに赴任した支局長の当時の政治・社会的状況の判断(閲覧申請直前に, 協会登録局の管轄下にあるシラット協会が政府の転覆を計画して軍を襲撃, 銃器を強奪する事件が発生)により, 閲覧はいっさい許可されなかった。
- 15) 協会登録局サバ支局長 Abdul Hamed bin Akob 氏に提供していただいたリストに基づく。なお, Manju ら(Manju and Kitingan 1987)らによると, 1980年代半ばに少なくとも58の民族別文化協会が存在していたという。
- 16) 現行の協会登録法では, 協会名はマレー語でなければならないと規定されている。したがってKDCA等もすべてマレー語の協会名を持つ。しかしながら, これらの協会が設立された当初はサバ州では英語がもっぱら使用されていたこともあり, 登録当初の協会名は英語名ないし英語のイニシアルを使った略称と呼ばれてきた。そこで本論文でも, 特に断らない限りは, 英語の略称を協会名として使用する。
- 17) 政治・経済的には中国系住民もサバの主要民族と言えるが, ここでは中国系, インド系住民の文化協会を便宜的に除外しておく。
- 18) サバ州の政権交代と民族の問題については拙稿(上杉 1999)参照。
- 19) サバにおける民族別文化協会が国民国家(国民文化)形成においてどのような役割を果たしているのかに関してはManjuらの予備的報告がある(Manju and Kitingan 1987)。
- 20) カダザン・ドゥスン族を総称する場合, 新聞等のマス・メディアではすでにカダザンドゥスン族(Kadazandusun)と表記することが定着している。だが, 本論文では, 特に断らない限りカダザン・ドゥスンと表記することとする。
- 21) サバの文化協会, ないしそれに類似した協会について述べるに当たっては, 中国系住民が設立した各種の協会に触れることが不可欠である。実際, 非中国系住民たちが文化協会を設立する有力な動機の一つが中国系のそれへの対応であったとされている。しかしながら, 非中国系の文化協会の動

態においてこそ民族の再編が顕著に観察されるという理由から、本論文では中国系住民の各種協会の動態に関する分析は行っていない。今後の課題としたい。

- 22) 本節の KDCA に関する記述は、主に、Topin and Udong (1998) に基づいている。
- 23) カダザン協会は当初、スポーツクラブとして出発したという (Mojuntin 1967)。
- 24) カダザン・ドゥスの民族名称問題に関する議論に関しては、Stephens (1960), Majihi (1979a, 1979b), Sario (1980,1989), Topin (1981), Pung (1986) Sarda (1994) 等を参照。
- 25) 最終的には 1995 年に、Pupil's Own Language Scheme に基づいて、カダザンドゥスン語を公教育に導入することが連邦政府によって承認された (Ch'ng and Liaw 1995)。
- 26) *Pitimbungakan Tagayo do Lalansanon Ka-8 KOISAAN KoubasananKadazan-dusun Sabah (KDCA), 27-29 March 1998, Hongkod Koisaan*, pp.87-88 に掲載されている、KDCA と USDA で取り交わされた合意書を参照。
- 27) ただし、1998 年にサバ文化局に提出された書面において、USDA 側はドゥスンという民族名を放棄した訳ではないことを明言している (注 25 も参照)。
- 28) ここで提示する資料は、サバ文化局の Jacqueline Pugh-Kitingan 博士が、サバの民族別協会名簿を作成するに当たって各文化協会に提出を求めた協会概要に関する書簡から得たものである。
- 29) ラナウの Ghani Gilong は UPKO 党員であったが、同時に、USDA 発足時の有力な会員であったという (Pugh-Kitingan 1989:368)。
- 30) USDA の設立では、マレー・ムスリム系諸民族の利益を代弁する統一サバ国民組織 (United Sabah National Organization : USNO. 1961 年結成) の党首であったムスタファ (Mustapha bin Harun) が、キリスト教徒が多数を占めるカダザン族政党 (UNKO) がサバ州政権を握ることを恐れ、カダザン・ドゥスン系諸民族の分断を画策して後押しをしたとも言われている。
- 31) USDA の副会長である、Raymond B.Tombung からの書簡 (1998 年 3 月 13 日付けでサバ文化局へ提出された書簡)。
- 32) 以下の記述は、主に、協会登録局サバ支局のバジャウ協会関連ファイル (PP/SB 510/64) に基づく。
- 33) 1993 年及び 1995 年の国際的なバジャウ / サマ会議については、*Sama Bajau Studies Newsletter* No.1 (1995 年) 及び No.2 (1996 年) を参照。
- 34) *Perlembagaan Persatuan Seni Budaya Bajau Sabah* を参照。
- 35) 少なくとも 2001 年 8 月の時点では、バジャウ協会は存続していた。
- 36) ムルット協会の記述は主に協会登録局サバ支部保存のファイル (PPP/SB 807/71) 及びサバ文化局 Pugh - Kitingan 博士へのムルット協会からの書簡 (差出人、日付等は不明) に基づく。

- 37) サバ文化局 Pugh - Kitingan 博士への、ピサヤ協会幹事長 Sadi bin Nasha からの 1998 年 3 月 26 日付けの書簡に基づく。
- 38) サバ文化局 Pugh - Kitingan 博士への、イラヌン協会幹事長 Adek @ Kelong Dani からの 1998 年 3 月 10 日付けの書簡に基づく。
- 39) サバ文化局 Pugh - Kitingan 博士への、ルン・ダイエ協会会長 Ricky Ganang からの 1998 年 6 月 3 日付けの書簡に基づく。
- 40) サバ文化局 Pugh - Kitingan 博士への、ティドン協会評議員 Yusof bin Ismail からの 1998 年 3 月 30 日付けの書簡に基づく。
- 41) USDA の副会長である、Raymond B. Tombung が、1998 年 3 月 13 日付けでサバ文化局へ提出した書簡の中に明記されている。
- 42) 民族的な統合をほぼ達成したカダザン・ドゥスン族は、1990 年代に入って、主に民族内の政治的（そしてまた地域的）主導権争いを展開している。例えば、カダザンドゥスン語を公教育に導入することが決定され、カダザンドゥスン語を標準化して辞書や教科書を作成するに当たっては、政治的な思惑から、KDCA（1995 年にカダザン・ドゥスン語辞典を出版）や Koisaan 文化開発研究所（Koisaan Cultural Development Institute, 1994 年にドゥスン・カダザン語辞典を出版）、カダザン・ドゥスン言語基金（Kadazan Dusun Language Foundation, カダザンドゥスン語テキストや副読本の作成、カダザン・ドゥスン語教室の開設）が主導権争いを繰り広げている。
- 43) サバ文化局 Pugh-Kitingan 博士へのムルット協会からの書簡（差出人、日付等は不明）に基づく。
- 44) 協会登録局ファイル（PPP / SB 510 / 64）には、協会登録局へ年次報告書を提出する義務を怠ったため、バジャウ芸術文化協会は 1999 年 4 月 15 日付けで一度登録を抹消されたことが記録されている。

引用文献

Abdul Kahim Sanip

1994, Kaum Bisaya Mula Mengorak Langkah melalui PBBS, *Utusan Borneo* 19 Rabiulawal 1415 (26 August 1994).

Appell, G.N.

1968, A Survey of the Social and Medical Anthropology of Sabah: Retrospect and Prospect. *Behaviour Science Notes* 3-1:1-54.

1970, Ethnographic Notes on the Iranon Maranao (Illanun) of Sabah. *Sabah Society Journal* 5:77-82.

Bandira Al Sabah

n.d., Perkahwinan Tradisi Masyarakat Iranun di Sabah (Unpublished Typewritten Manuscript).

Bandira Alang

1984, Darangen: Epik Masyarakat Iranon-Maranao, *Sabah Times* 6 Julai 1984.

- Castles, Stephen and Alastair Davidson
 2000, *Citizenship and Migration: Globalization and the Politics of Belonging*. London: Macmillan Press.
- Ch'ng Boon Hen and Liaw Sin Kuang
 1995, Kadazandusun Language OK. *Daily Express* 1 April 1995.
- Evans, Ivor H.N.
 1952, Notes on the Bajaus and Other Coastal Tribes of North Borneo, *Journal of Malayan Branch, Royal Asiatic Society* vol.24, part1:48-55.
- Jones, L.W.
 1966, *The Population of Borneo: A Study of the People of Sarawak, Sabah and Brunei*. London: Athlone.
- Kurus, Bilson B.
 1998, Migrant Labor: The Sabah Experience. *Asian and Pacific Migration Journal* 7-2/3:281-195.
- Lee, Edwin
 1976, *The Towkeys of Sabah*. Singapore: Singapore University Press.
- Lee, Yong Leong
 1965, *North Borneo: A Study in Settlement Geography*. Singapore: Eastern University Press.
- Luping, Herman
 1994, *Sabah's Dilemma: The Political History of Sabah (1960-1994)*. Kuala Lumpur: Magnus Books.
- Majihi, F. Mathius
 1979a, The Question of Identity Part I. *Daily Express* 7 March 1979.
 1979b, The Question of Identity Part II. *Daily Express* 8 March 1979.
- Manju, Masidi and Kitingan, Jacqueline
 1987, The Role of Cultural Associations in Nation Building, read at IDS Political Affairs Forum on 13 June 1987 in Kota Kinabalu (Sabah, Malaysia).
- Mohd. Said Hinayat
 1990a, Pengenalan. In Mohd. Salleh Mohd. Said, *Meniti Zaman*. Kota Kinabalu: Persatuan Sabah Bajau Bersatu, ms.4-9.
 1990b, Masyarakat Bajau/Sama Sepintas Laju. In *Persembahan Budaya Bajau di Kuala Lumpur*, n.p.: Persatuan Sabah Bajau Bersatu (PSBB), ms.4-5.
- Mohd. Yassin Isa
 1987, *Asal-Usul Bajau* (Buletin Membaca Bil.2). Kota Kinabalu: Perpustakaan Negeri Sabah (Unpublished Typewritten Manuscript).
- Mojuntin, Peter
 1967, The Kadazan Language. *Sabah Times* 12 October 1967.
Monthly Statistical Bulletin Sabah, June 1998

- 1998, n.p.: Department of Statistics, Malaysia (Sabah Branch).
- Mutalib M.D
- 1999, *IC Palsu: Merampas Hak Anak Sabah*. Lahad Datu (Sabah, Malaysia): Abdul Mutalib B. Mohd. Daud.
- Obon, Irenena
- 1999, *The Sama Horsemen*. Kota Kinabalu: Persatuan Seni Budaya Bajau, Sabah.
- Panduan Pendaftaran Pertubuhan*
- 1997, Kuala Lumpur: Jabatan Pendaftaran Pertubuhan Malaysia.
- Panduan Pindaan Undang-Undang Pertubuhan Berdaftar*
- 1997, Kuala Lumpur: Jabatan Pendaftaran Pertubuhan Malaysia.
- Pengenalan Suku Kaum Bisaya*
- n.d., Photocopied Extract from Persatuan Bisaya Bersatu Sabah, 13 August 1994, Dewan Pa'Musa, kept at Sabah Museum.
- Persembahan Budaya Bajau di Kuala Lumpur*
- 1990, n.p.: Persatuan Sabah Bajau Bersatu (PSBB)
- Perlembagaan Persatuan Seni Budaya Bajau Sabah*
- n.d, Mimeograph. Kota Kinabalu (Sabah, Malaysia): Persatuan Seni Budaya Bajau, Sabah.
- Pitimbungakan Tagayo do Lalansanon Ka-8 KOISAAN Koubasanan Kadazandusun, Sabah (KDCA), 27-29 March 1998, Hongkod Koisaan.*
- 1998, Kota Kinabalu (Sabah, Malaysia): Koisaan Cultural Development Institute.
- Sama Bajau Studies Newsletter No.1*
- 1995, Kyoto: Centre for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- Sama Bajau Studies Newsletter No.2*
- 1996, Kyoto: Centre for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- Population and Housing Census of Malaysia 1991: State Population Report Sabah*
- 1995, Kuala Lumpur: Department of Statistics, Malaysia.
- Pugh-Kitingan, Jacqueline
- 1989, Cultural Development in Sabah, 1963-1988. In Kitingan, Jeffery G. and Ongkili, Maximus J. (eds.), *Sabah: 25 Years Later, 1963-1988*, Kota Kinabalu (Sabah, Malaysia): Institute for Development Studies (Sabah), pp.359-404.
- Pung Chen Choon
- 1986, Kadazans or Dusuns: What's Differences? *Sabah Times* 26 December 1986.
- Regis, Patricia
- 1989, Demography. In Kitingan, Jefery and Ongkili, Maximus J. (eds), *Sabah 25 Years Later, 1963-1988*, Kota Kinabalu (Sabah, Malaysia): Institute for Development Studies, (Sabah), pp.405-450.

- Sarda, James
 1994, Wrangle over a Label. *Daily Express* 17 September 1994.
- Sario, Ruben
 1980, The Kadazan-Dusun Row: No Force on Dusuns to Change Name. *Daily Express* 19 March 1980.
 1989, USDA: We Do Not Recognise 1961 UNKO Resolution: The Term Dusun Must Stay. *Sabah Times* 14 March 1989.
 1995, Bisaya Joins the List of Groupings. *Borneo Mail* 13 February 1995.
- Sejarah Ringkas Masyarakat Iranun*
 1995, n.p.: Bahagian Sejarah/Epigraphi, Jabatan Muzium Sabah (Malaysia) (Unpublished Typewritten Manuscript).
- Societies Act 1966, Societies Regulations 1984*
 n.d., n.p.: NDC Snd.Bhd.
- Stephens, Donald
 1960, Dusun or Kadazan? *North Borneo News and Sabah Times* 30 June 1960.
- Sullivan, Anwar and Regis, Patricia
 1981, Demography. In Sullivan, Anwar and Leong, Cecilia (eds.) *Commemorative History of Sabah, 1881-1981*, Kota Kinabalu (Sabah, Malaysia): Sabah State Government Centenary Publications Committee.
- Topin, Benedict
 1981, Some Aspects of the Kadazan Culture. In a booklet on *The 2nd Delegates Conference of the Kadazan Cultural Association*, held in 5th-6th December 1981, pp.43-49.
- Topin, Benedict and Udong Rayner F.
 1998, Koisaan: A Brief Introduction. In *Pitimbungakan Tagayo do Lalansanon Ka-8 KOISAAN Koubasanan Kadazandusun Sabah (KDCA), 27-29 March 1998, Hongkod Koisaan*. Kota Kinabalu (Sabah, Malaysia): Koisaan Cultural Development Institute, pp.31-39.
- 上杉富之
 1999 「民族と文化の創造 - 東マレーシア・サバのカザダン人の事例から」 田村克己 (編) 『文化の生産』 東京: ドメス出版, 65-81 頁。
- Uesugi, Tomiyuki
 2000, Migration and Ethnic Categorization at International Frontier: A Case of Sabah, East Malaysia. In Abe, K. and Ishii, M. (eds.), *Population Movement in Southeast Asia: Changing Identities and Strategies for Survival*. Osaka: Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, pp.33-55.